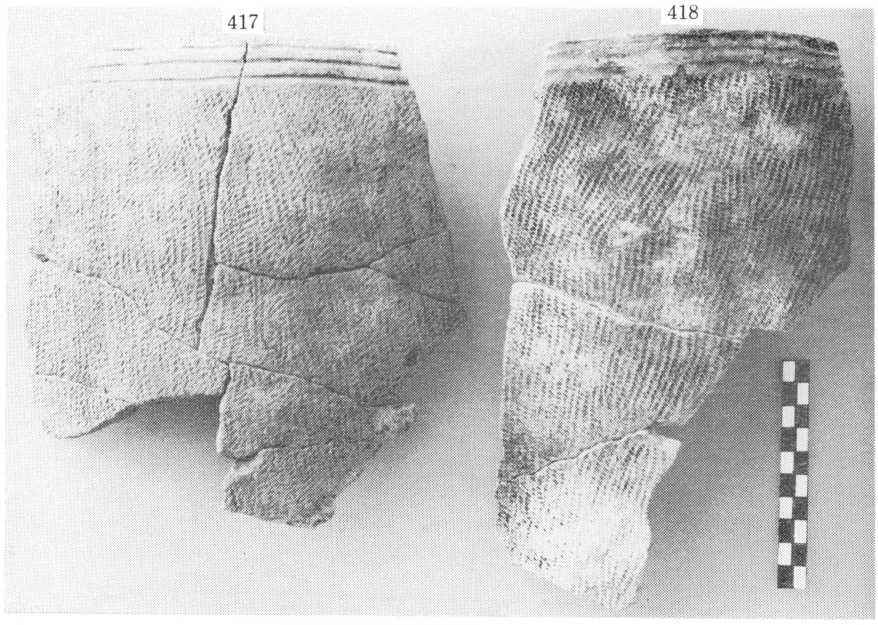
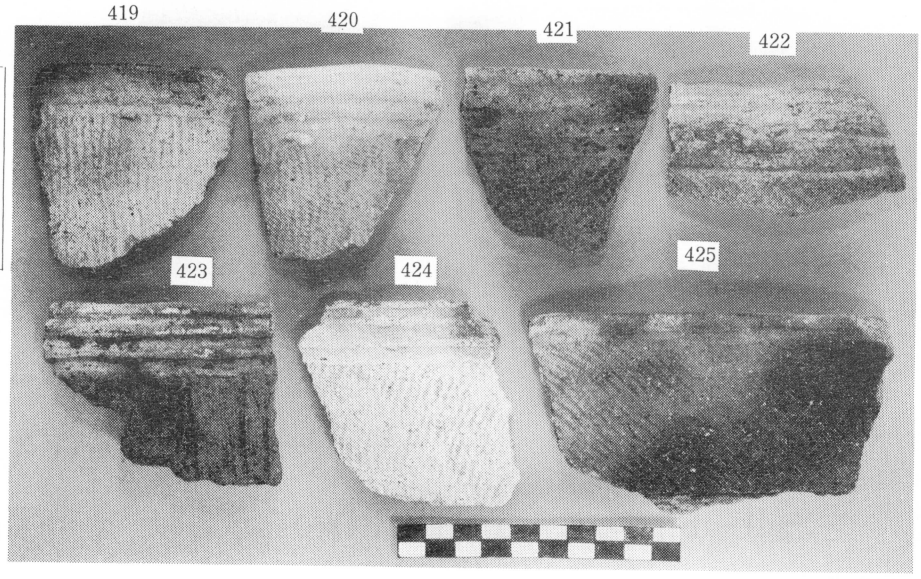


ＣＡⅡ－417
AK2Ⅱ－418



ＡＪ2Ⅱ－422
ＡＪ1Ⅱ－425
AK1Ⅱ－424
ＣＢⅡ－420・419
423
AN2Ⅱ－421

〔第８群土器〕－417・418，419～425

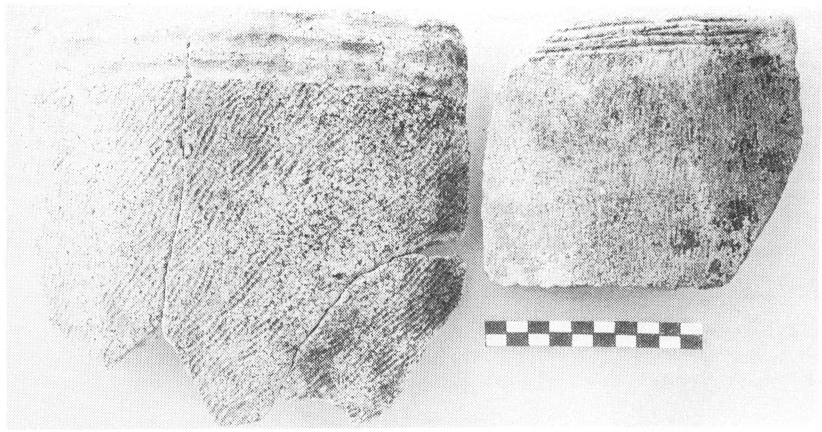
☆　ここに掲げた、上・下段のものは、すべて第８群とした大洞Ｃ２式粗製深鉢形土器である。

・　いずれも頸部に平行沈線文のあるもので大形の土器である。

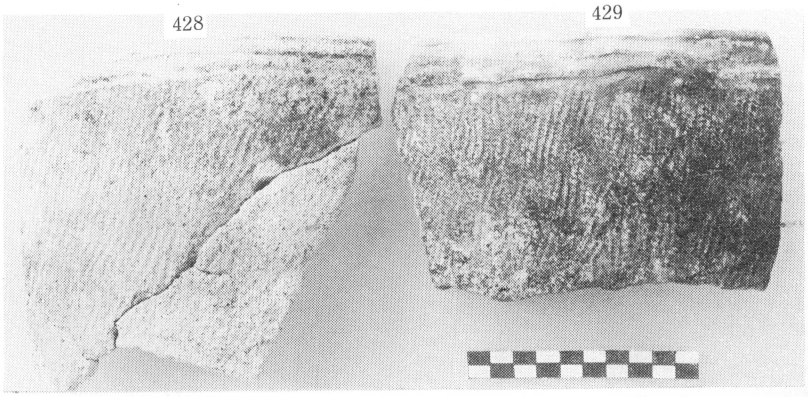
426　427

AK₂Ⅱ－426
AK₁Ⅱ－427

☆ａ類→ 426～431



428　429



☆AK₂－428・429

430　431

☆AJ₂Ⅱ－430・431

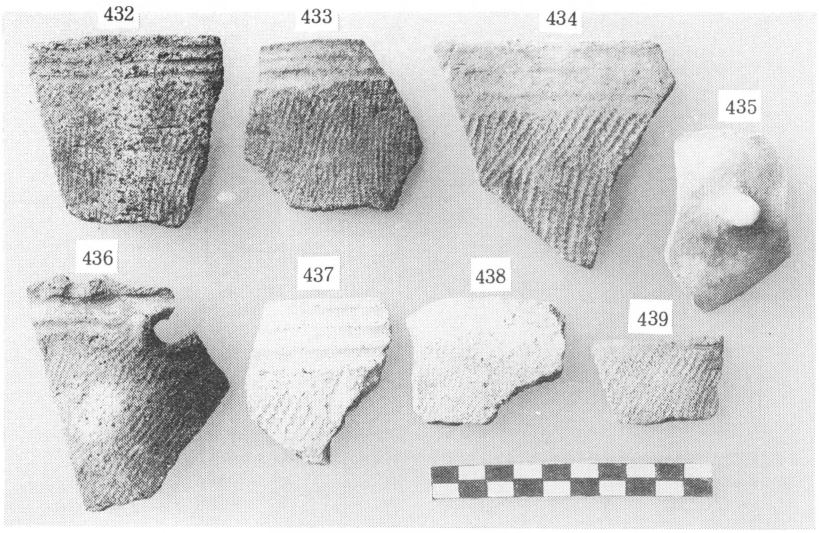
〔第８群土器〕426・427，428・429，430・431

☆　ここに掲げたものも、第８群とした大洞C２式の粗製深鉢形土器である。

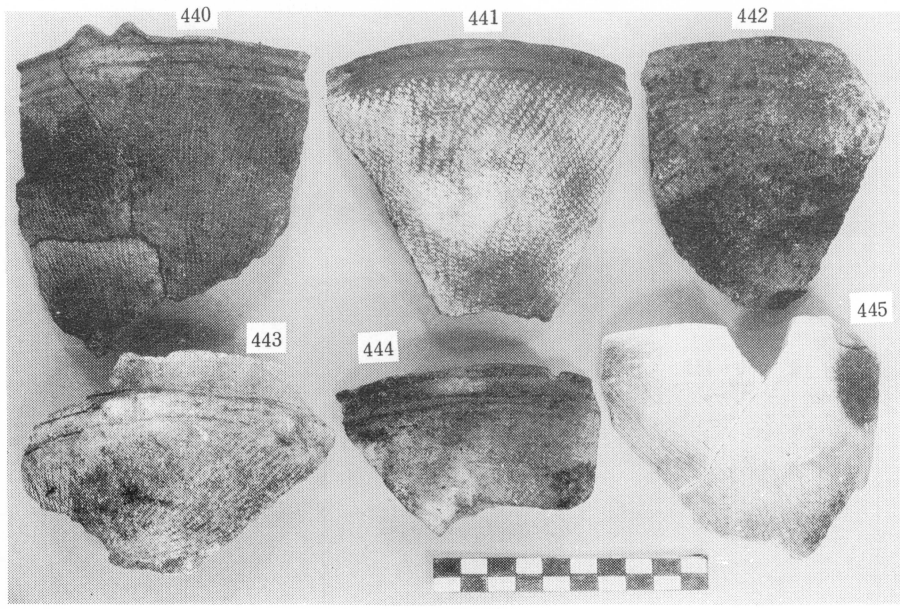
・　いずれも口頸部に３条の平行沈線文が施文されるもので、胴部には、斜縄文が施文されたものが多い。

〔第８群土器〕（晩期の土器）　☆ａ類→（432～434，437）　　P・L37

☆ ａ類→（432～434,437）



CX１Ⅱ－432・433・
434・435・
436・437・
438・439



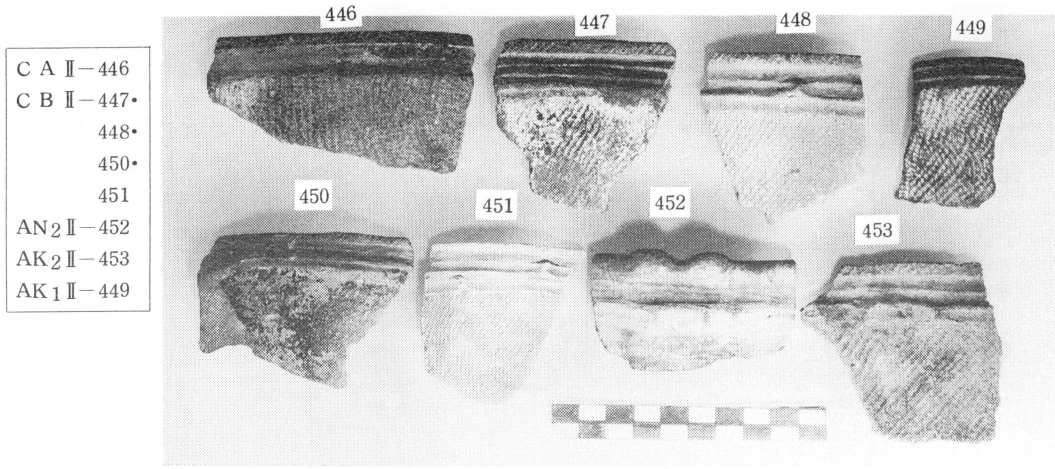
CＡⅡ－440・
443・
444
AJ２Ⅱ－441
AK２Ⅱ－442
AK１Ⅱ－445

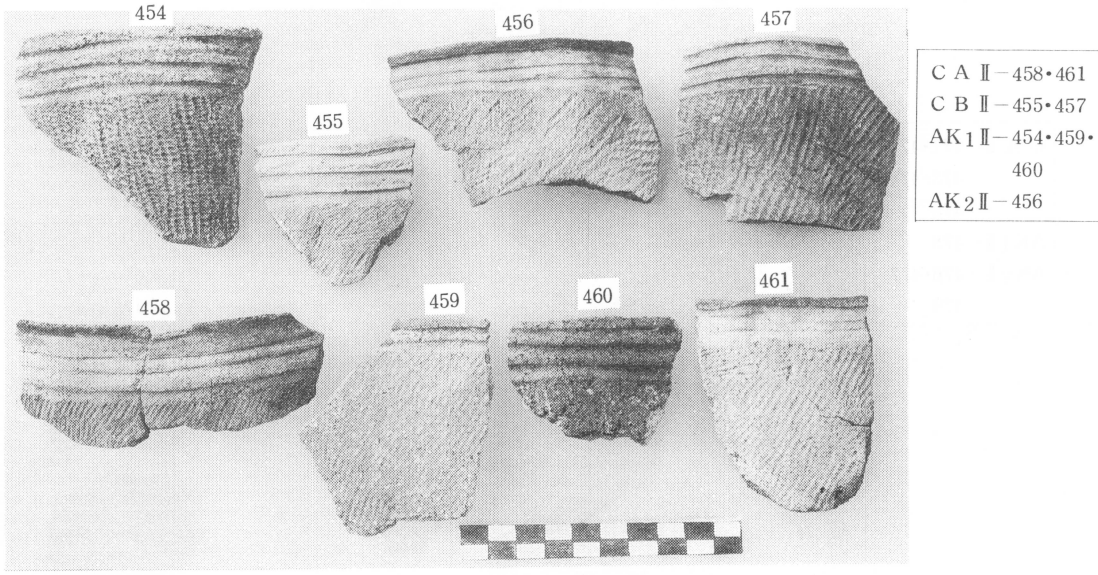
〔第８群土器〕－432～439，440～445

☆　ここに掲げたものは、上段の（432～434，437～439）は第８群とした大洞C２式深鉢形、（435）は浅鉢形底部、（436）は片口鉢形土器である。

また、下段の（440～445）は、大洞C２式の鉢形土器であろう。

・　上・下段とも粗製土器で、斜縄文、撚糸文、条痕文等が胴部に施文される。



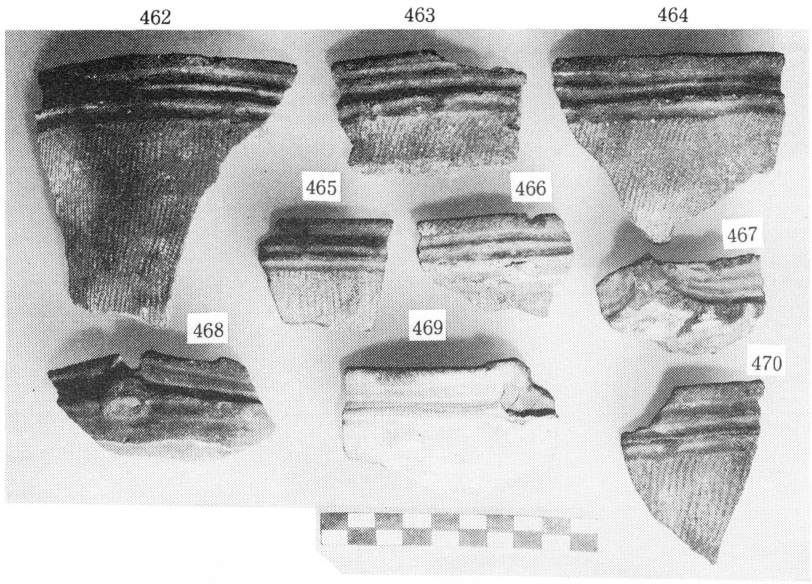


〔第８・９群土器〕－446～453，454～461

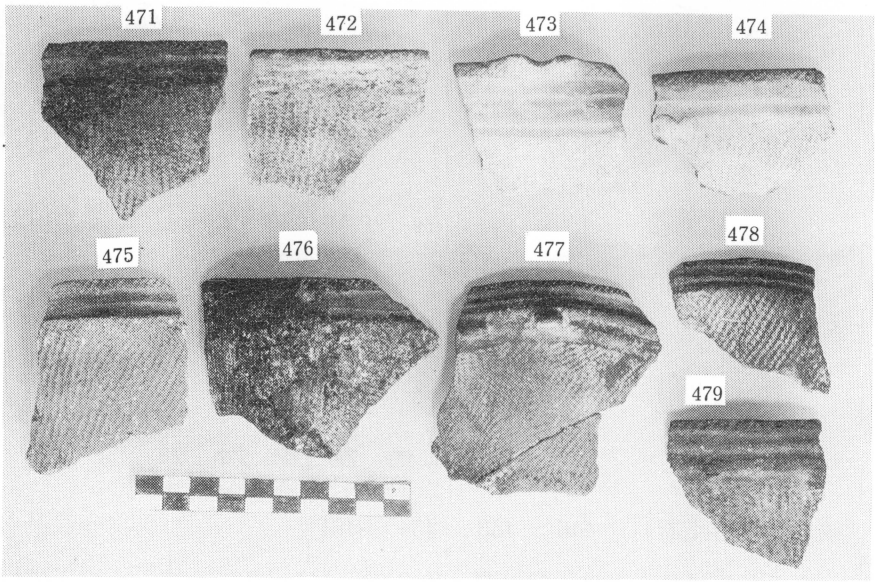
☆　ここに掲げたものは、第８群・第９群とした大洞C２式、大洞A式粗製鉢形土器である。

・　このうち、上段の（451）は、小突起の形態から大洞A式、（452）は大洞C２式と思われる。

・　また、下段の（454～461）は大洞C２式鉢形土器である。このうち、上段の（446～450・453）は、口縁上端にも縄文が施文されるもので一つのタイプである。このタイプを第９群（大洞A式）として分類したがどうであろうか先学のご教示を迄う。



ＡＫ２Ⅱ－462・464・465・470・
ＣＢⅡ－463・466
ＣＡⅡ－467・469
ＡＪ２Ⅱ－468

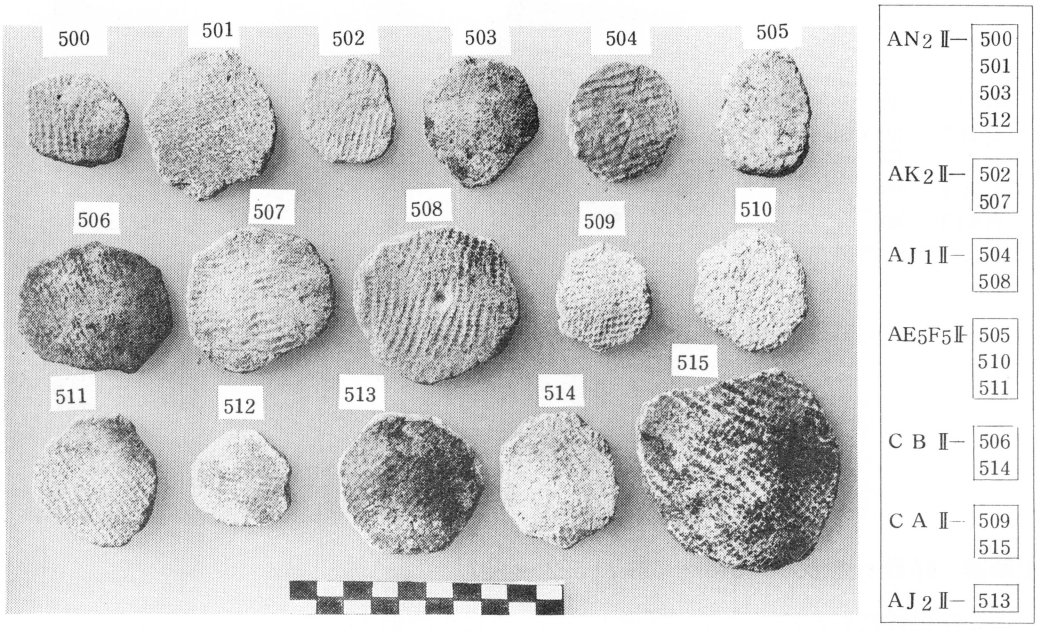


ＣＡⅡ－471・472・473・474・475
ＡＫ１Ⅱ－478
ＡＫ２Ⅱ－476・477・479

〔第９群土器〕－ 462 ～ 470，471 ～ 479

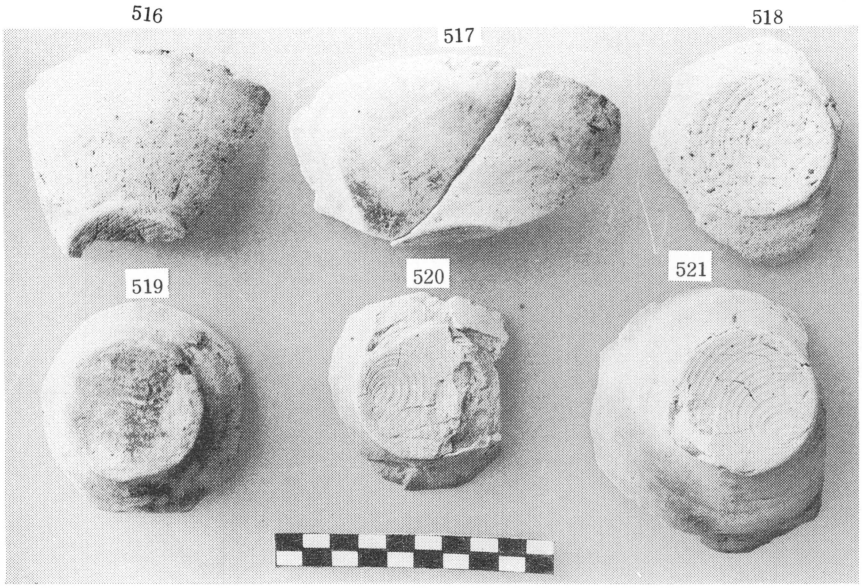
☆　ここに掲げたものは、第９群（大洞Ａ式）土器として分類したが、どうであろうか？

- このうち、（468・469）は、口縁と頸部の形態から分類した。（468）二叉山型の口縁突起は、当遺跡の大洞Ｃ２式では出土がないものである。（469）は、胴部に入り組み工字文があるもののようである。
- 他のものは上・下段とも、口縁上端に縄文のあるもので、Ｐ・Ｌ38で述べたとおり、一応第９群（大洞Ａ式）とした。



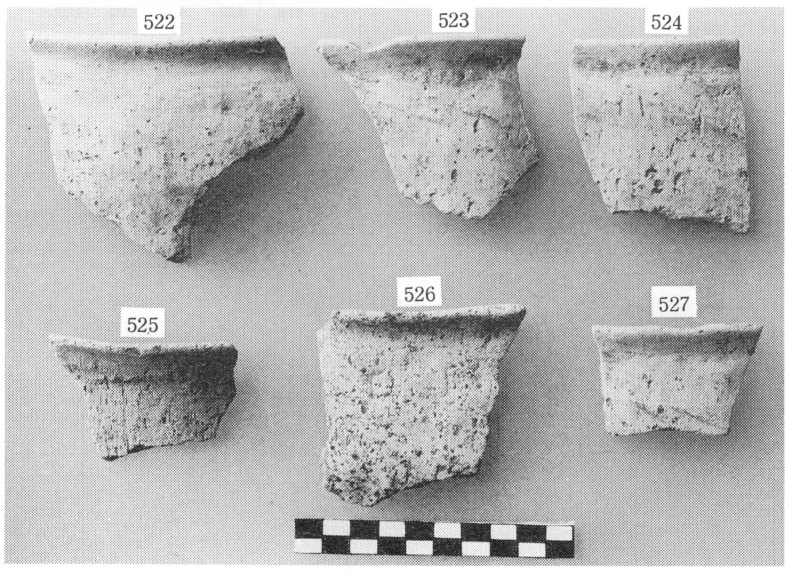
〔円盤状土製品〕－ 480 ～ 499， 500 ～ 515

ここに掲げたものは、すべて円盤状土製品である。上段は、後期の土器片を活用したものである。また下段は、晩期の土器片を利用したものであるが、貫通孔のあるものは出土しなかった。未貫通のものは、わずか２このみである。



CAⅡ－516
CBⅡ－517
AJ1Ⅱ－518
AK2Ⅱ－519
AK1Ⅱ－520
AJ1Ⅱ－521

AJ1Ⅱ－522
CBⅡ－523・524
527
CAⅡ－525
AK1Ⅱ－526



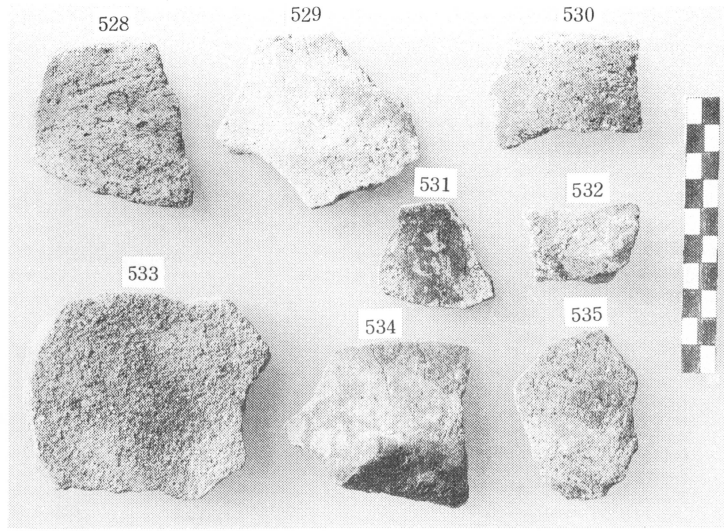
〔土師器―坏形・甕形〕－516～521，522～527

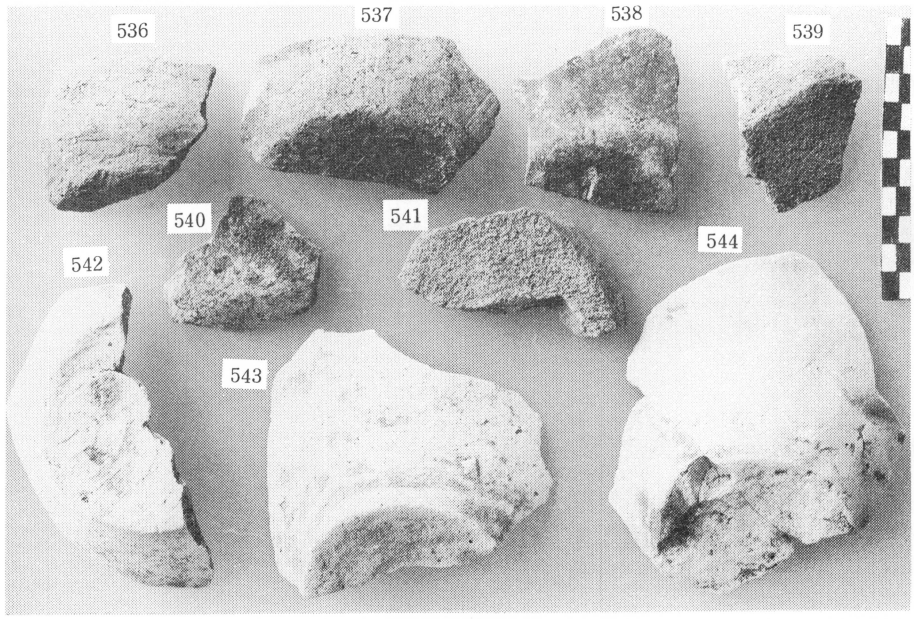
ここに掲げたものは、上段が坏形土師器、下段が甕形土師器である。

- 上段のものは、ロクロの使用による糸切り痕を見せるものもあり、下段のものは、へら削り痕が認められ、口頸部の外反に斉一性を認めるものである。
- いずれも、その器形から「東北々部の土師器型式」第二型式に型式分類されるものである。

〔2号住居址地床炉出土、土師器〕　　P・L42

CBⅡ（焼土内）
528・529・530
531・532・533
534・535





CBⅡ－ 536 537 538 549 541 542 543

CAⅡ－ 544
AN3Ⅱ－ 540

〔2号住居址出土、土師器，および底部〕

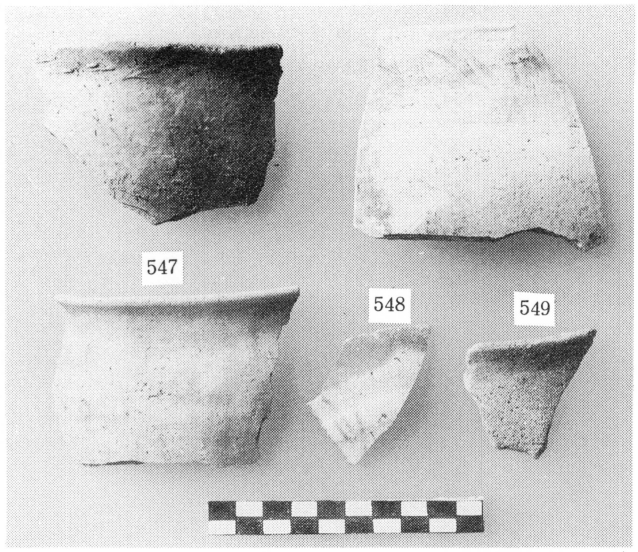
☆　ここに掲げたもののうち、上段は2号住居址地床炉内より出土したものである。甕形土師器およびその底部であるが、住居址の年代を知る手がかりになるものである。

・　下段は、甕形土師器の底部各種であるが、上段と比較して年代的には差はないものと考えられる。

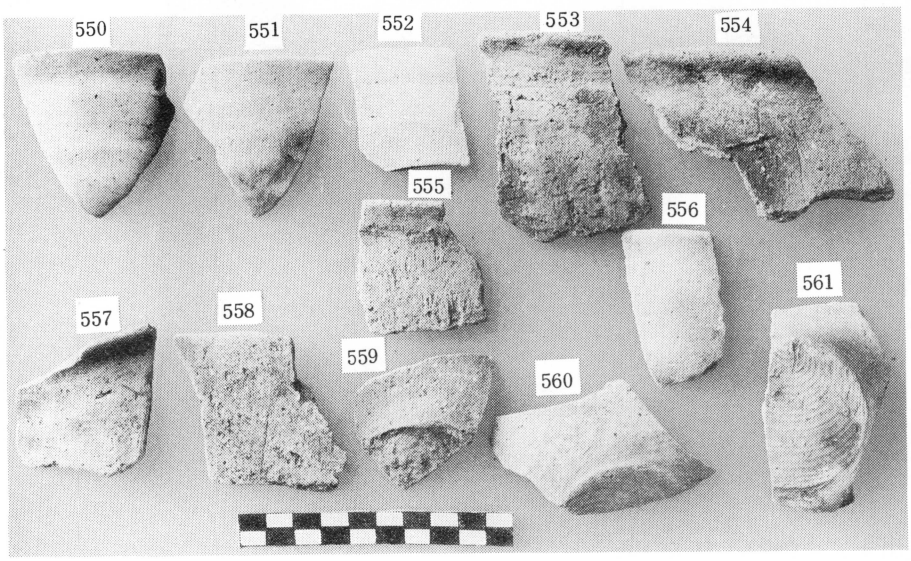
〔土師器－甕形・須恵器－坏形〕 P・L43

CBⅡ－	545
	547
	549
AE5F5－	546
AJ1Ⅱ－	548

（548）→須恵器



〔土師器－坏形・甕形〕

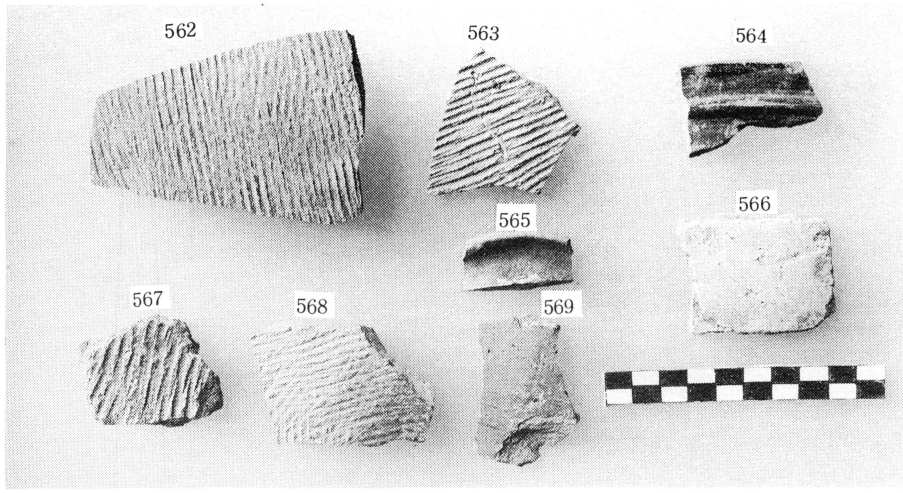


〔土師器－坏形・甕形・須恵器－坏形〕

（556）→須恵器

CBⅡ－	550・551・552・553 554
CAⅡ－	555・556
CBⅡ－	557・558・561
AJ1Ⅱ－	559・560

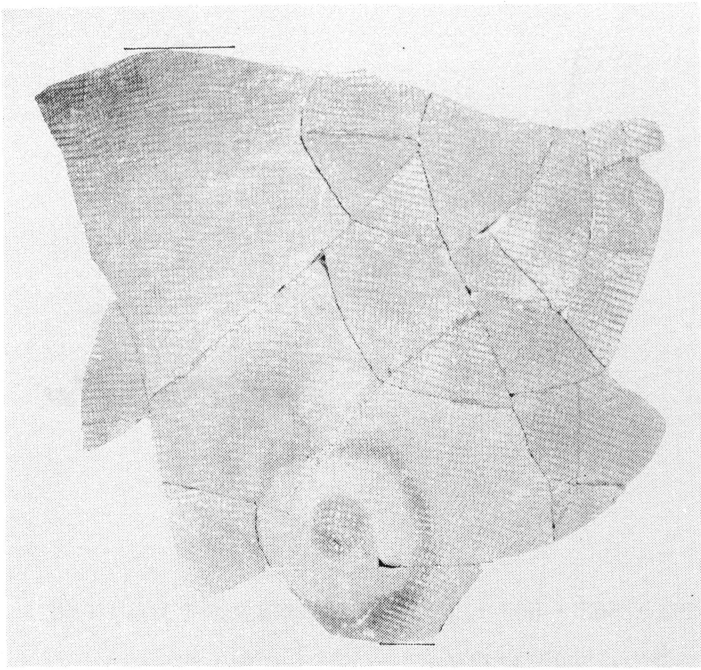
AJ1Ⅱ－562
AN2Ⅱ－563
567
AJxⅠ－564
CBⅡ－565
CAⅡ－566
569
AK1Ⅱ－568

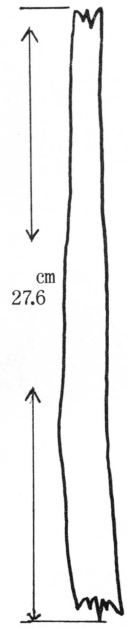


〔須恵器・土師器・陶器〕

☆　ここに掲げたもののうち、（562・563・565・567～569）は須恵器であるが（562・563・567・568）は甕形、（565・569）は長頸壺、（564）は地方窯で焼かれたと思われる陶器片、（566）は土師器片であった。

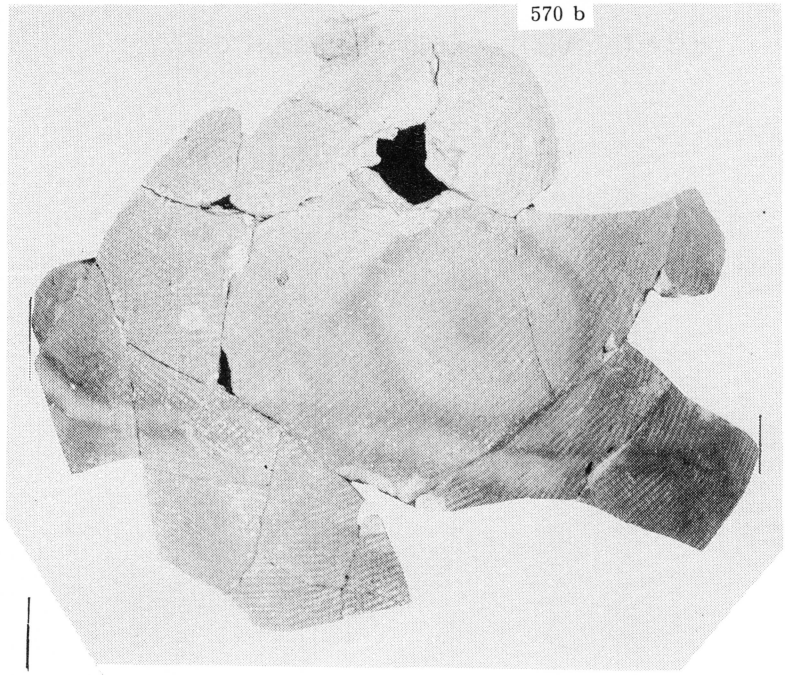
570 a

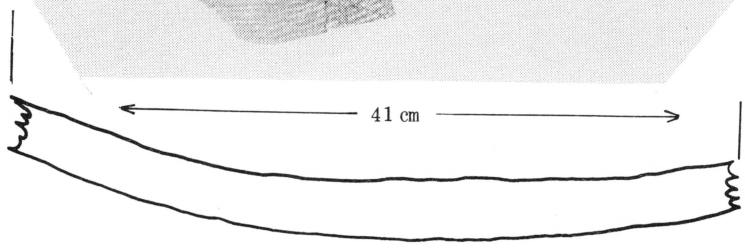




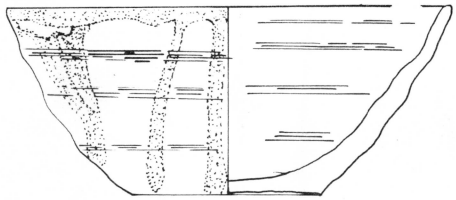
☆ CB－E1 Ⅱ－570 a
570 b

570 b





571



AJ1－Ⅱ

〔坏形須恵器〕－571　（図上復原）

☆　ここに掲げたものは、A地区J1グリットのⅡ層より出土した、坏形須恵器である。

☆　出土層が既述のとおりⅡ層の黒土層であるが、このⅡ層は再堆積層であって、この層から既述してきた晩期、後期、前・中期の土器群が出土している。したがって混入と考えるのが妥当であろう。

・　このものは、約$\frac{1}{3}$現存のものであるが、カーブの計算によって復原したものである。写真で見るとおり、火だすき痕を残すもので、器形は、前田野目窯址出土のものと同様である。

・　なお、底面に回転糸切り痕を認めるものである。色調は赤黄色、内面は灰青色を呈する。

〔大形甕形須恵器〕－570　（一部掲示）→｛掲示したものの他に60片あり｝

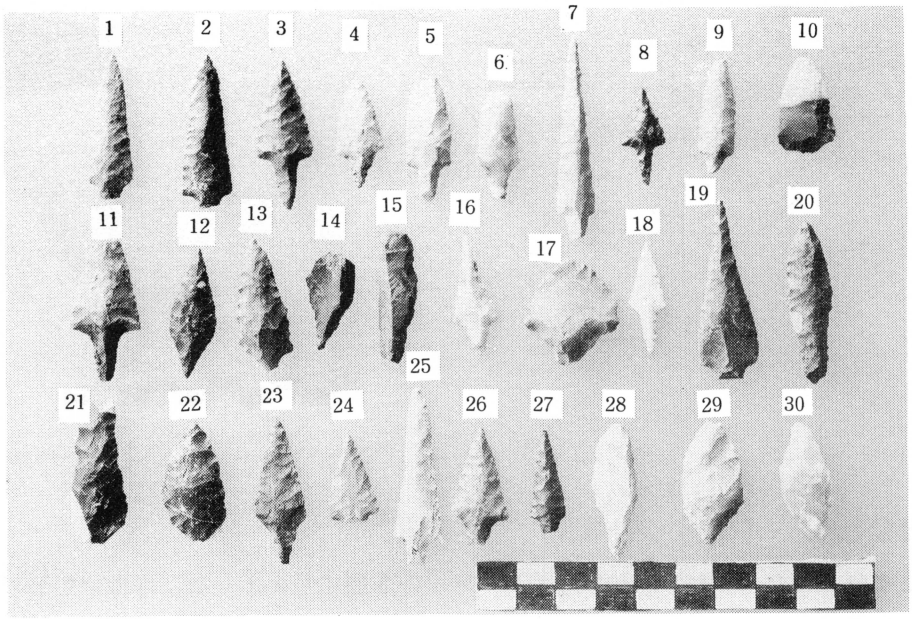
☆　このP・L45－（570ⓐⓑ）は他に60片の破片とともに、C地区BグリットE1区Ⅱ層下、すなわち、2号住居址床面（第11図参照）上に貼り付いて出土したものである。

　またその覆土すなわちⅡ層より出土したもの（掲示せず－60片）に分かれて検出した。これらの破片は、すべて接着できるものである。

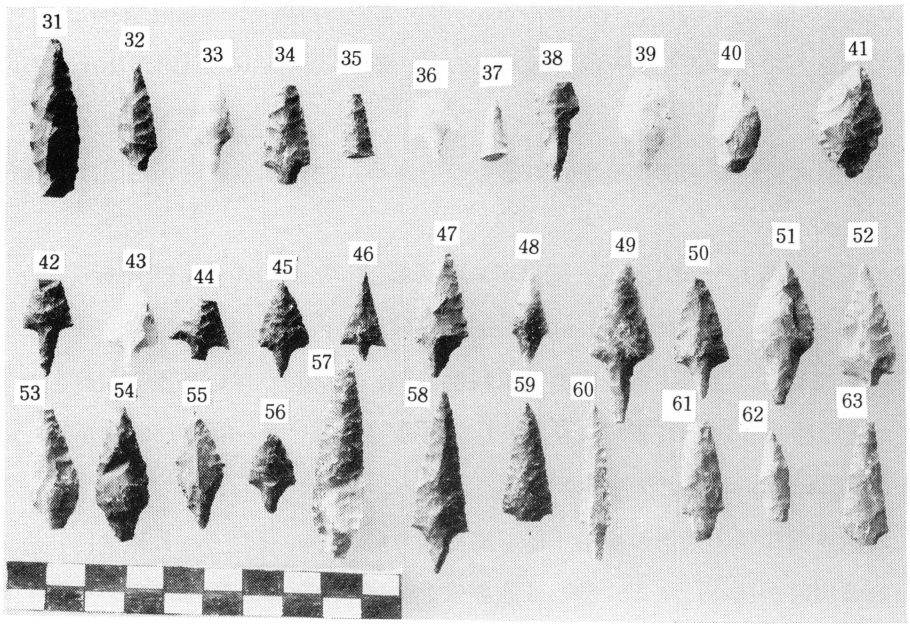
・　この須恵器片は、大形の甕形土器の底面より胴下半のもので、日輪状に、ささえたと見られる痕跡がある。（570ⓑ）は底部付近、（570 aは、胴部下半のものである。このものは、2号住居址の年代を決定できる出土状況であった。）

〔石　鏃〕

〔その１〕

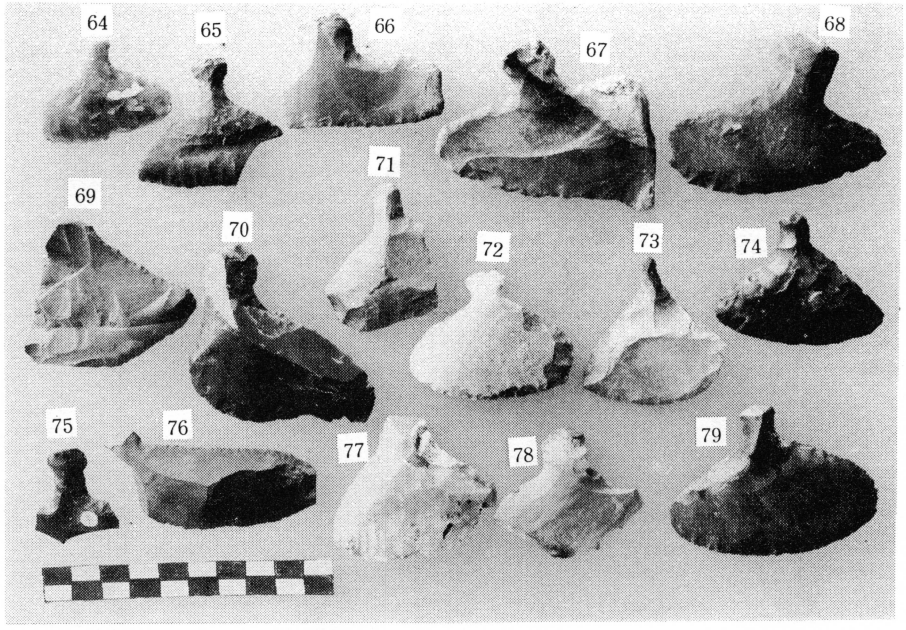

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

〔その２〕

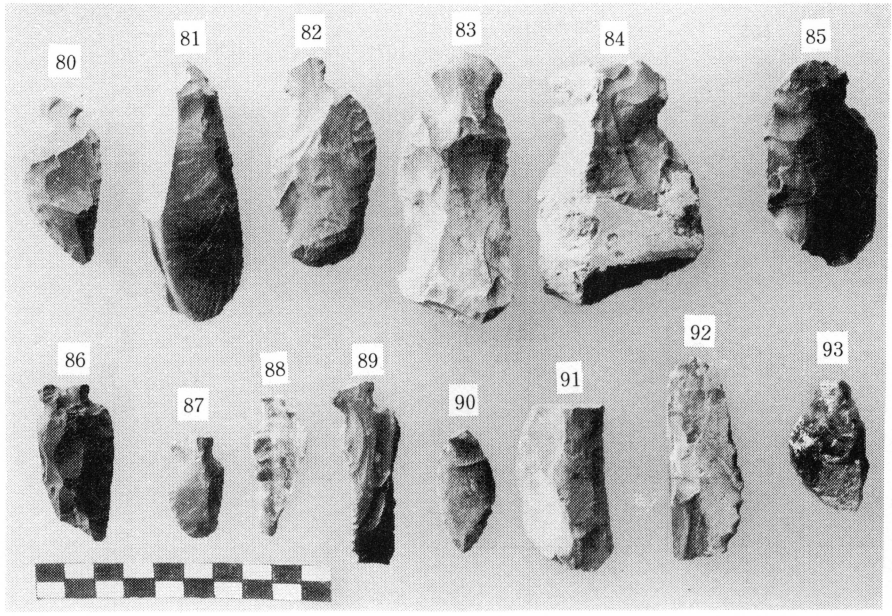

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63

〔削　器〕（横形・縦形）

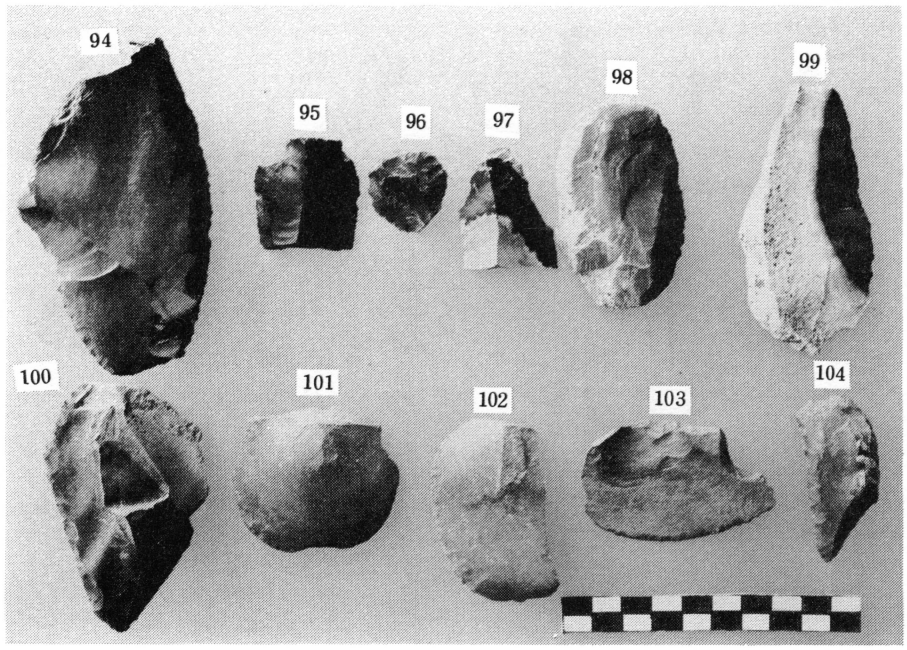
〔その１〕



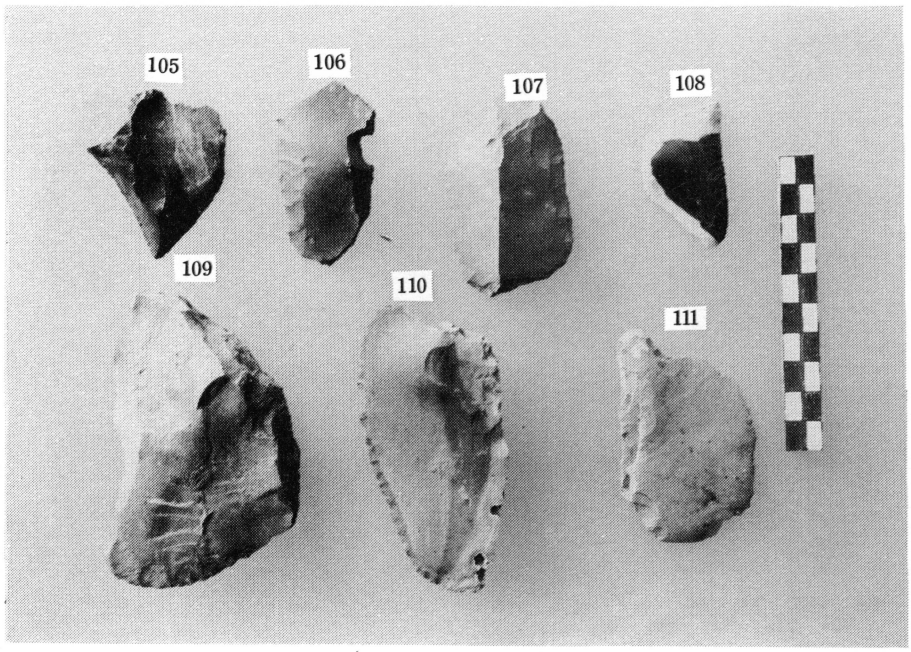
〔その２〕



〔その1〕

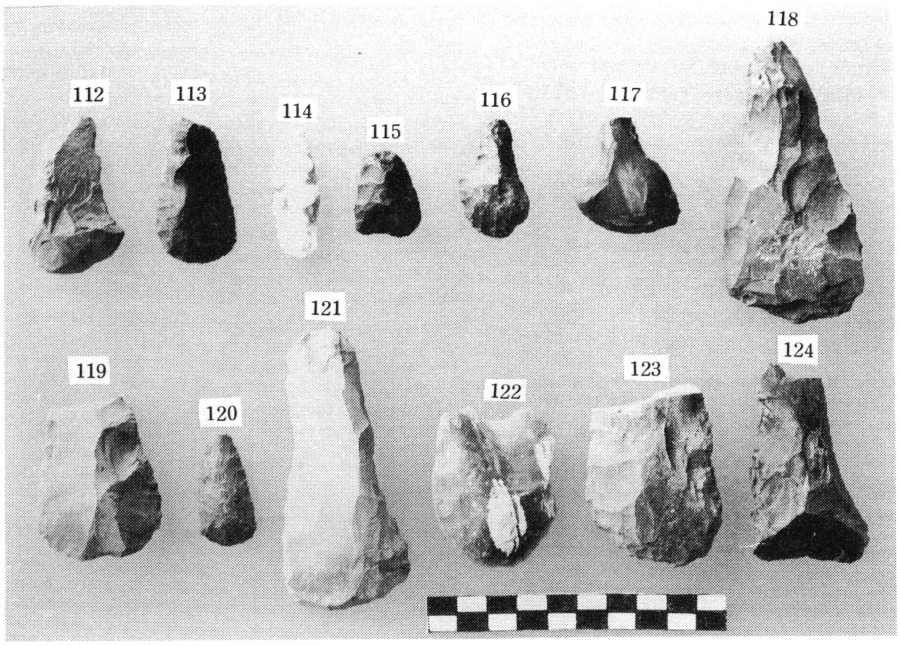


〔その2〕

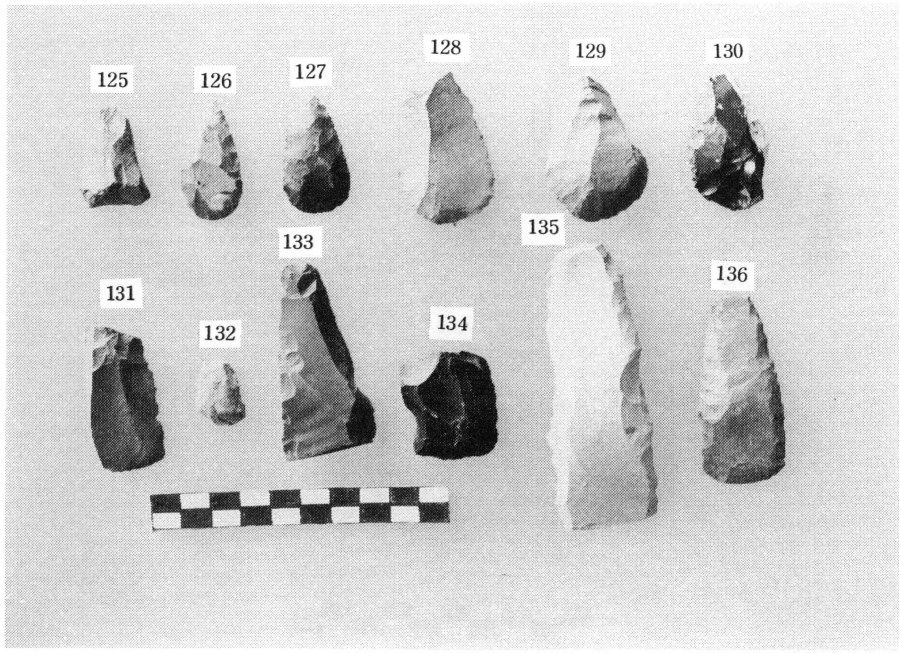


〔掻　器〕　（定形～不定形）

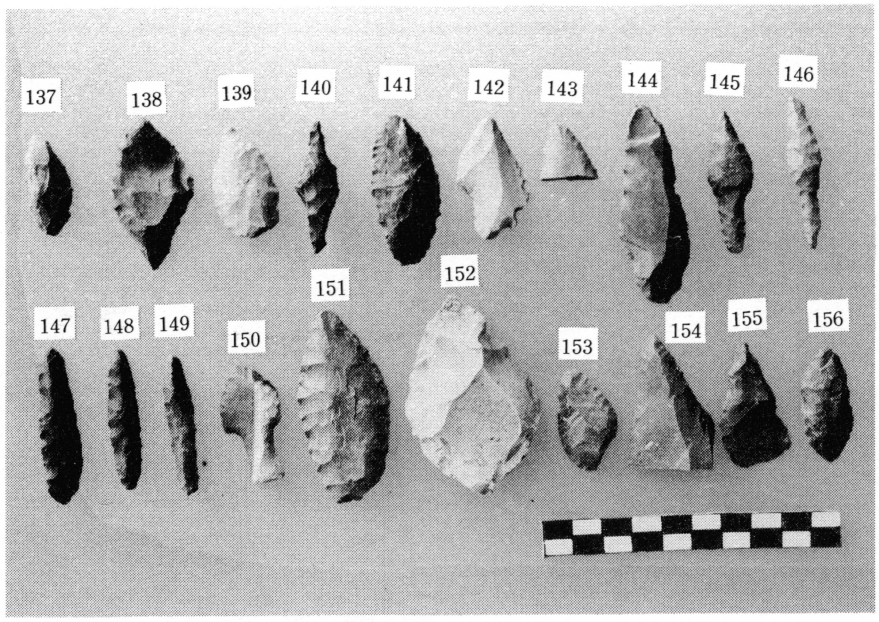
〔その１〕



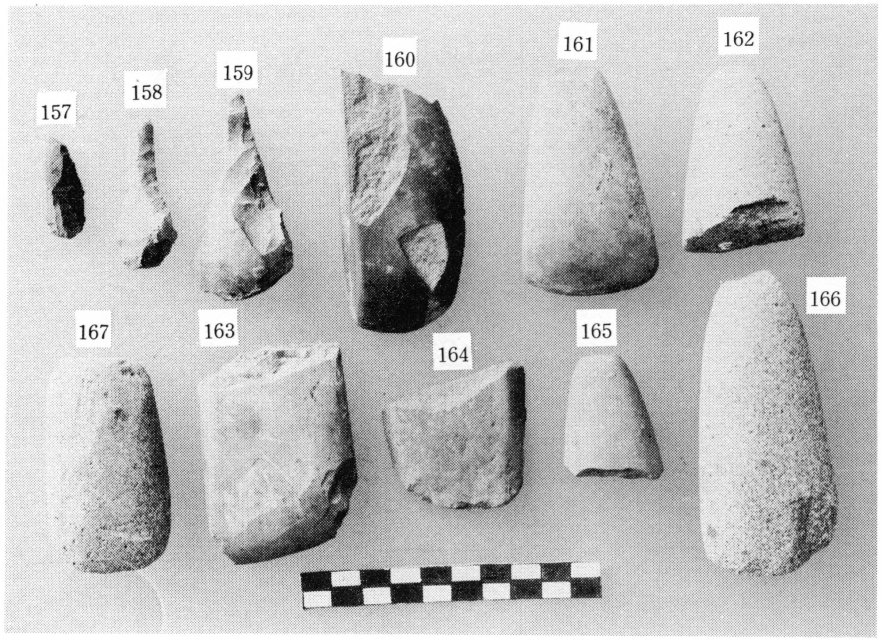
〔その２〕



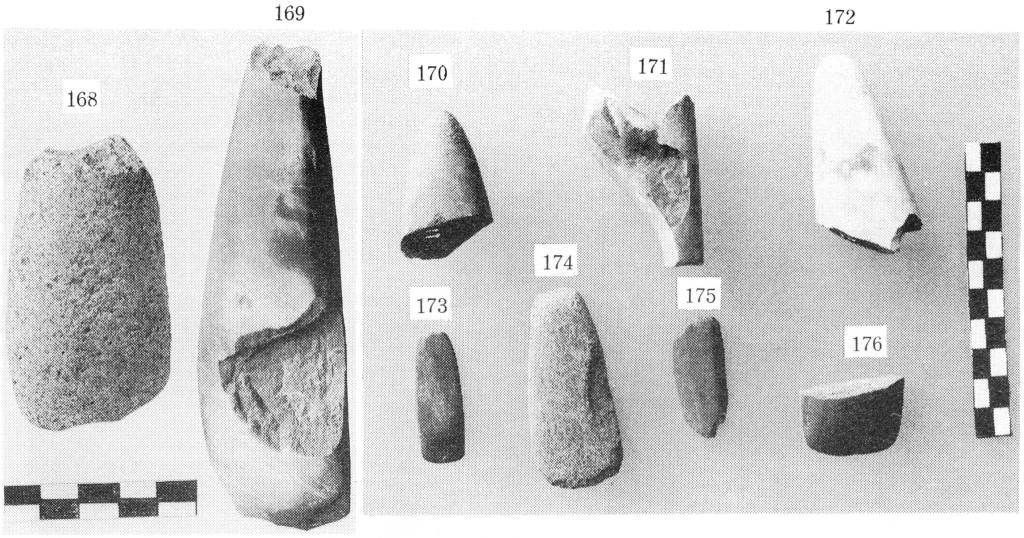
〔石　槍〕


137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156

〔石　錐・石　斧〕

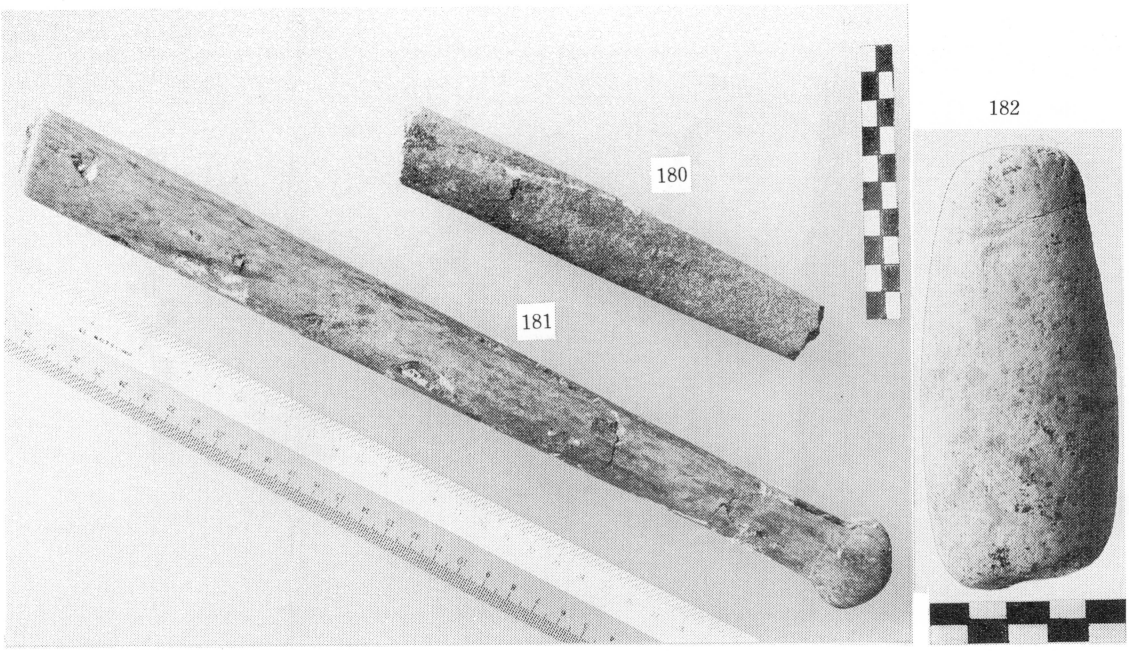

157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167

〔石　斧〕

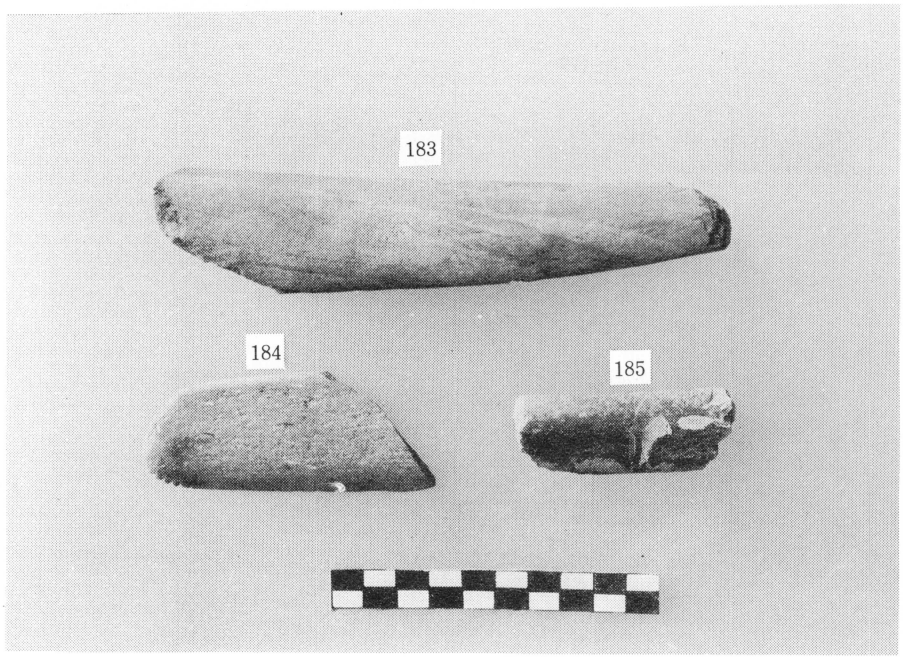


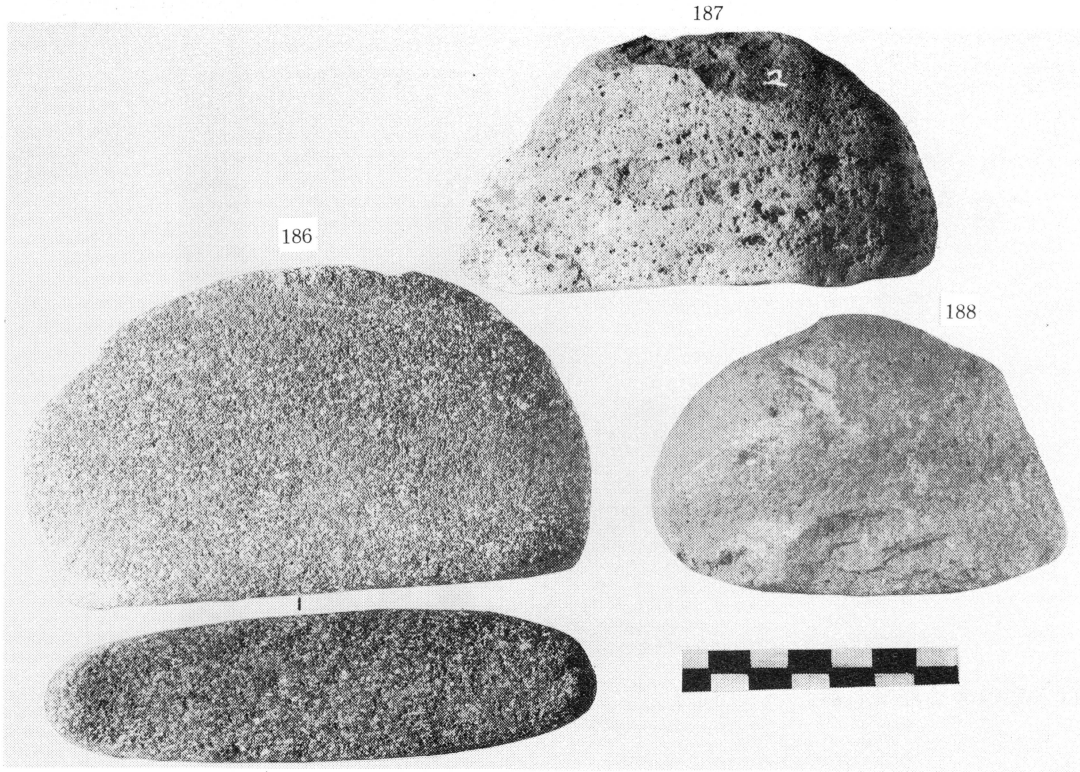
〔石　棒〕

〔石　棒〕

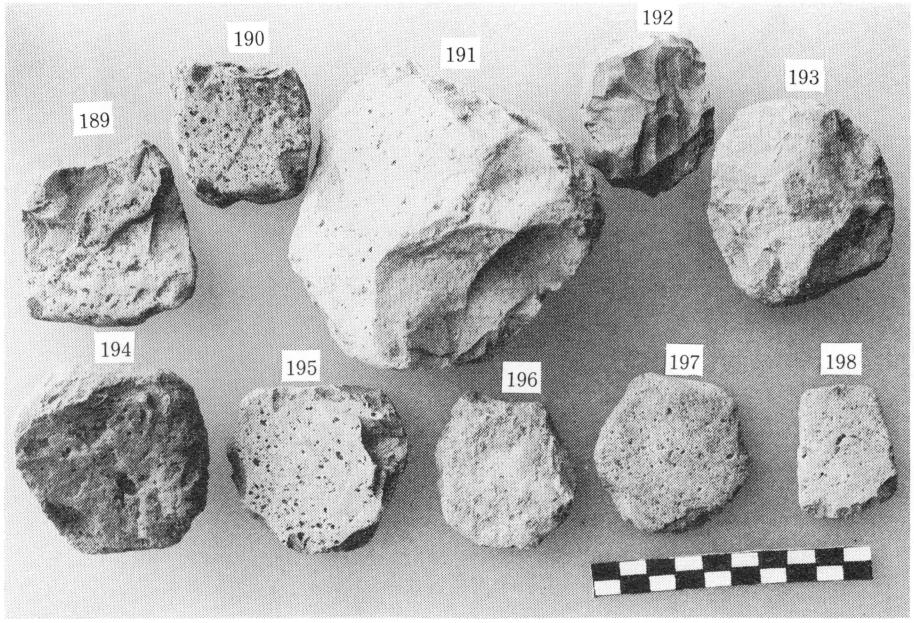


〔石　刀〕



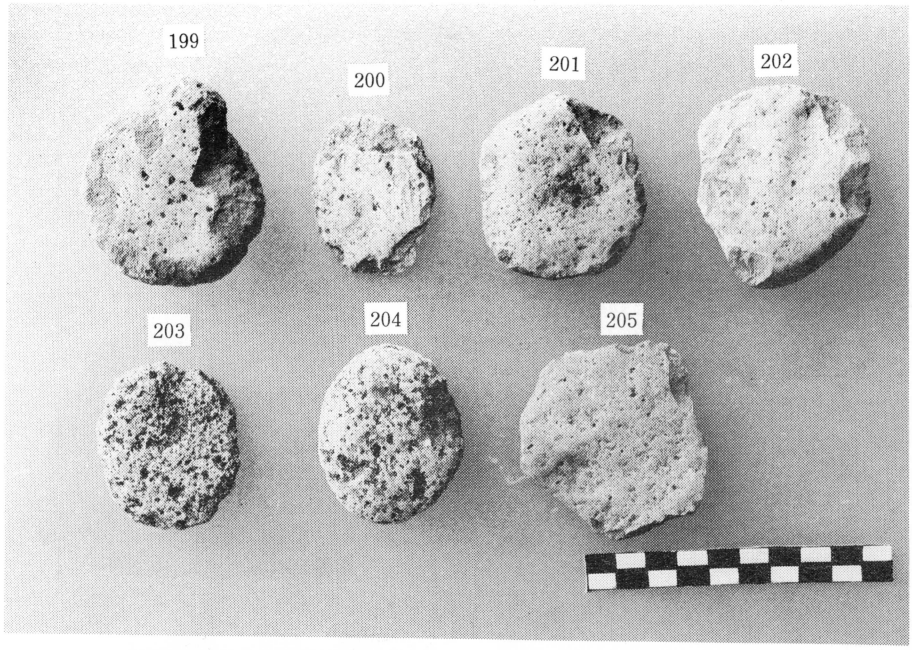


〔打欠きのある扁平石器〕→（梯形・方形）

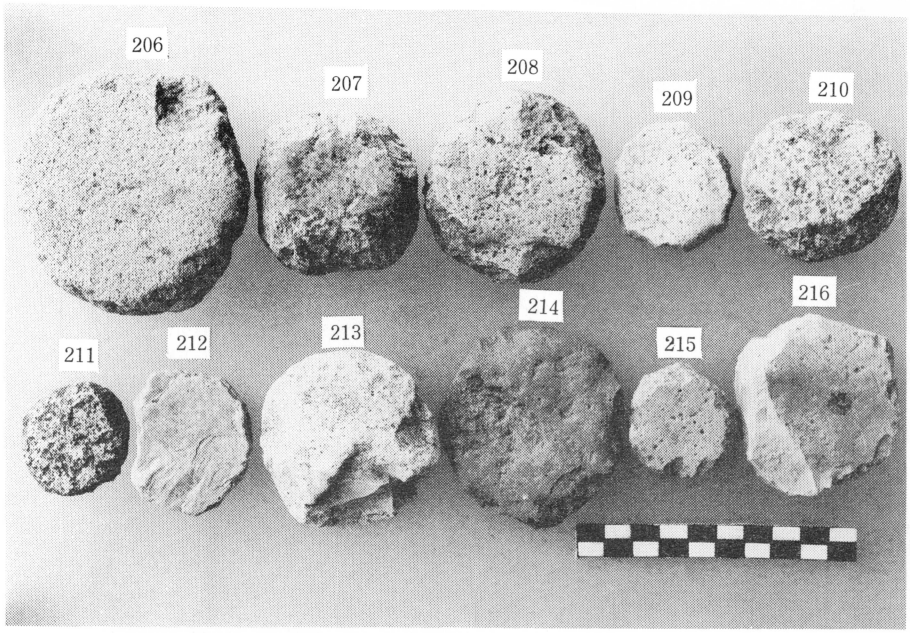


〔打欠きのある扁平石器〕→（楕円形）　　ＳＰ・Ｌ９

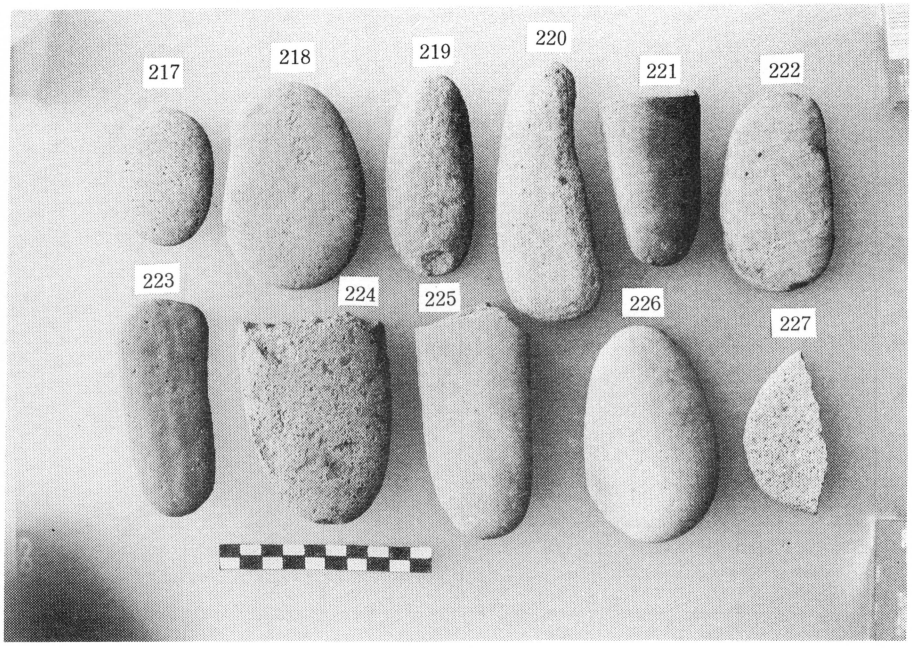
〔その２〕



〔打欠きのある扁平石器〕→（円形）　　〔その３〕

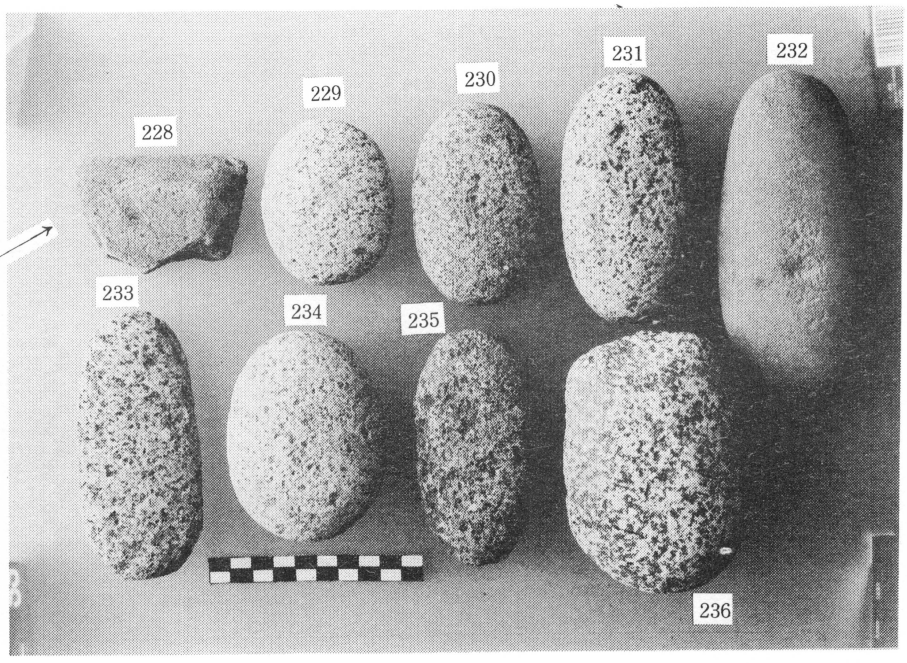


〔磨痕のある扁平石器〕　　ＳＰ・L10



〔タタキ石〕　　〔その１〕

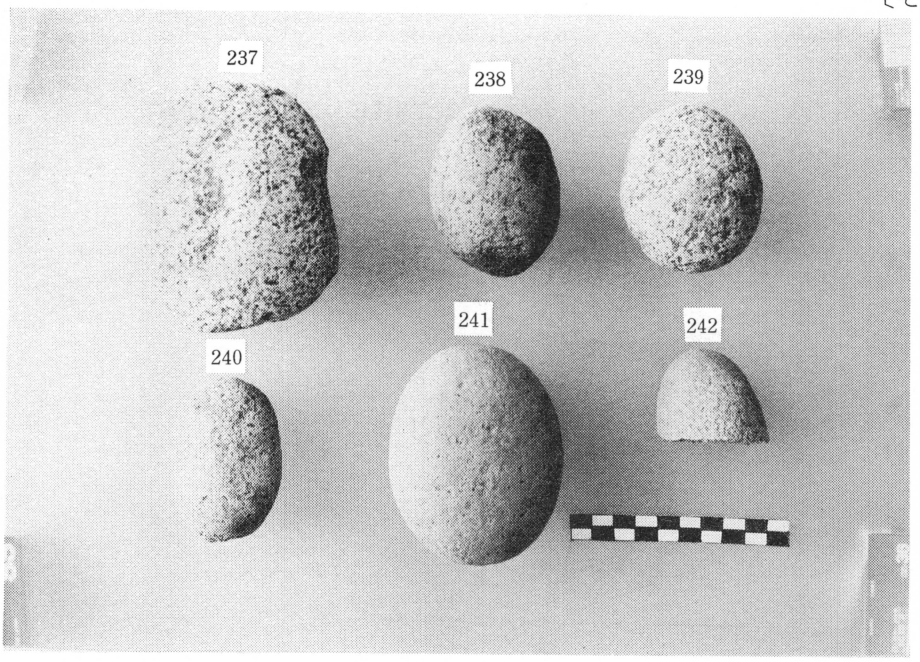
（土師器第二型式に伴うものである。）



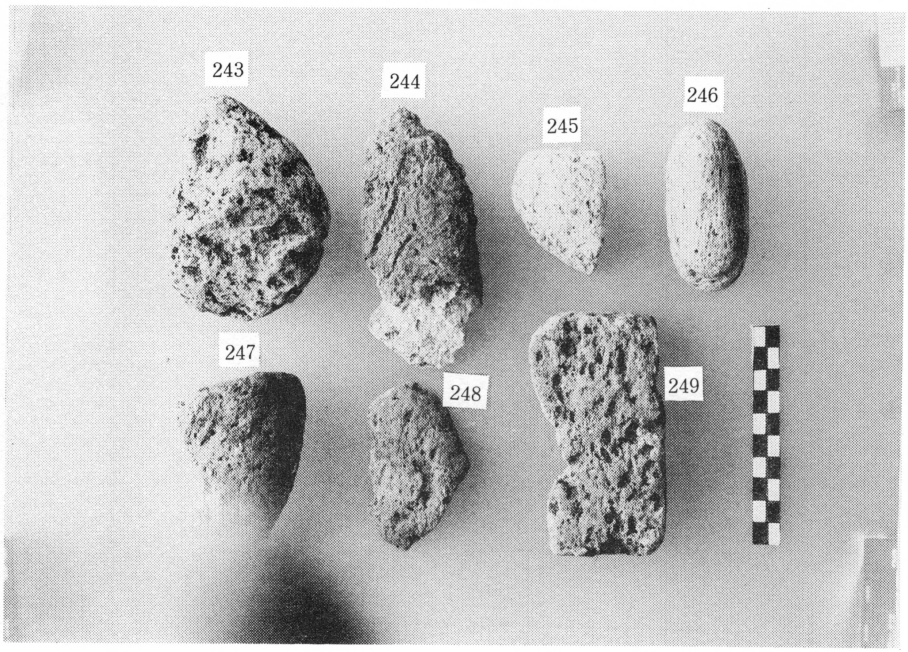
〔タタキ石〕

SP・L11

〔その２〕



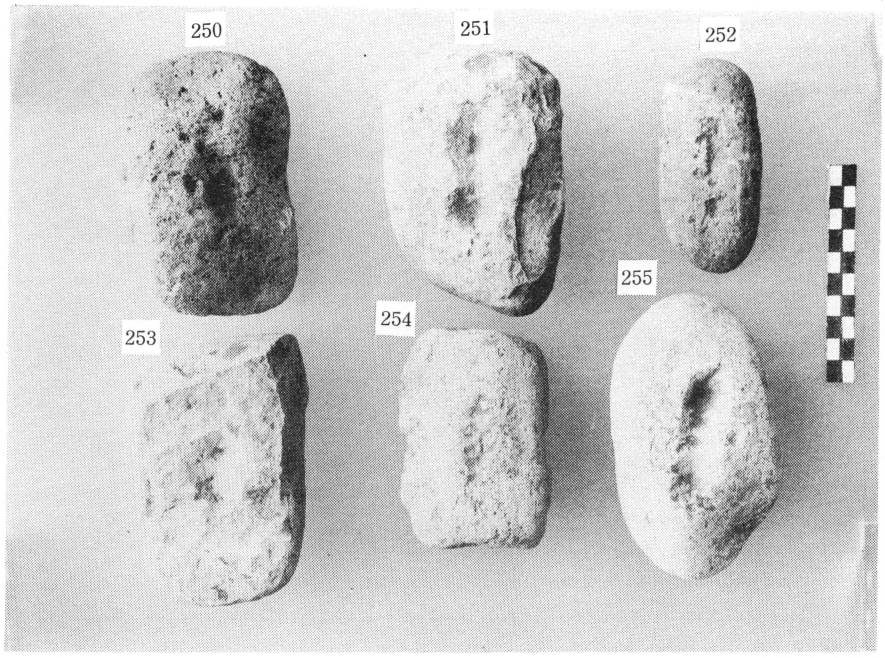
〔軽石製品〕



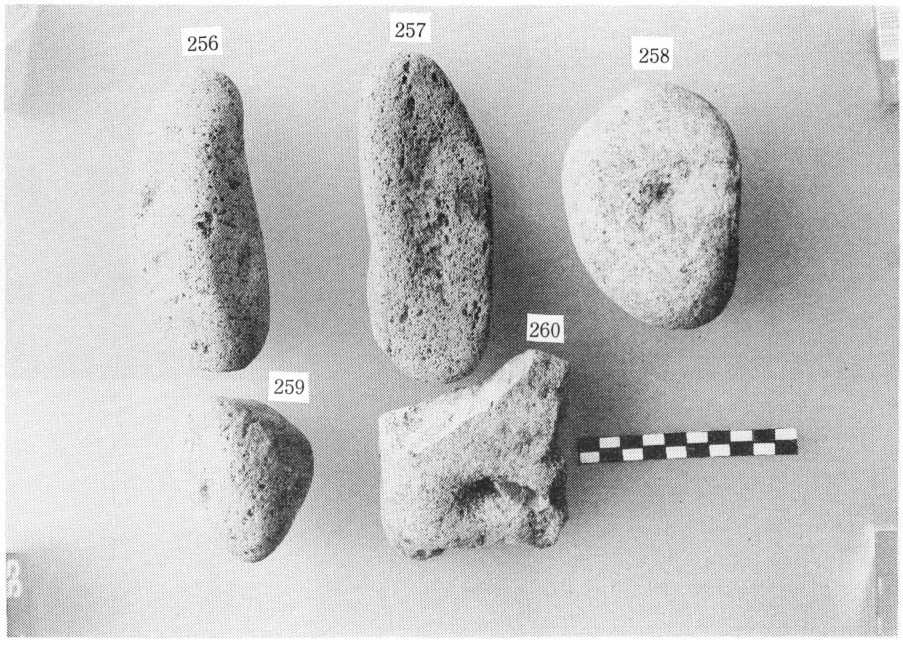
〔クボミ石〕

SP・L12

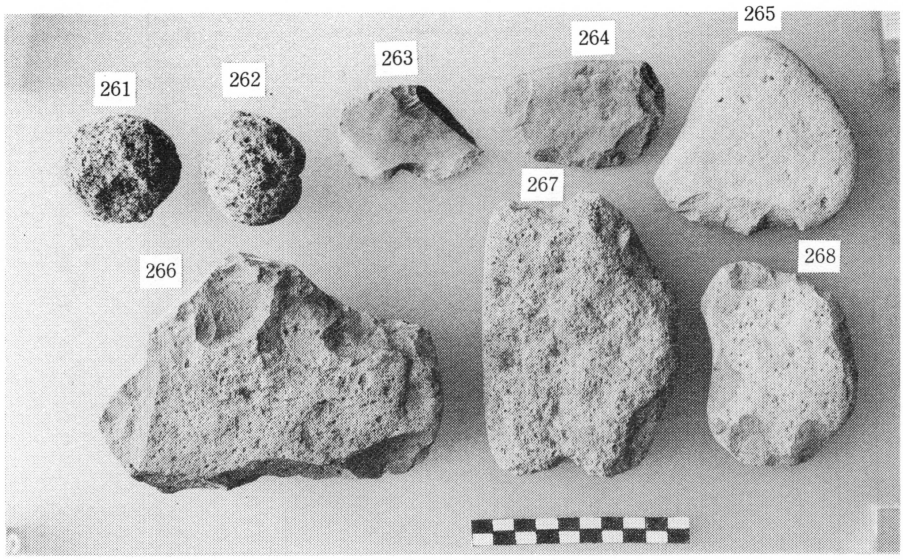
〔その1〕



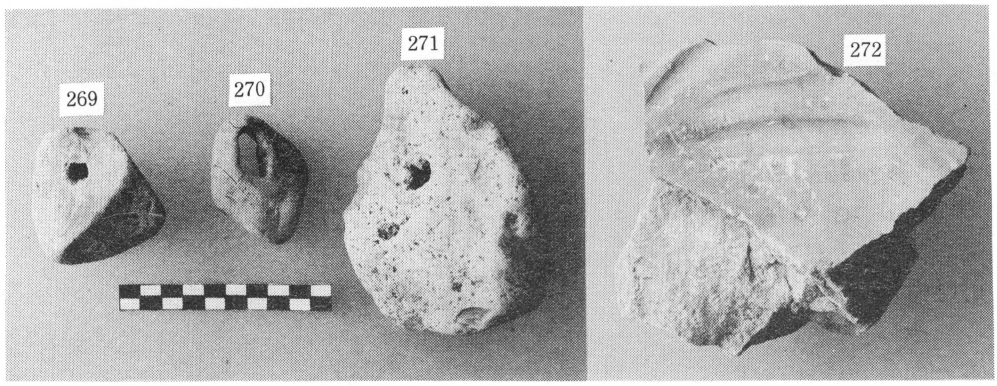
〔その2〕



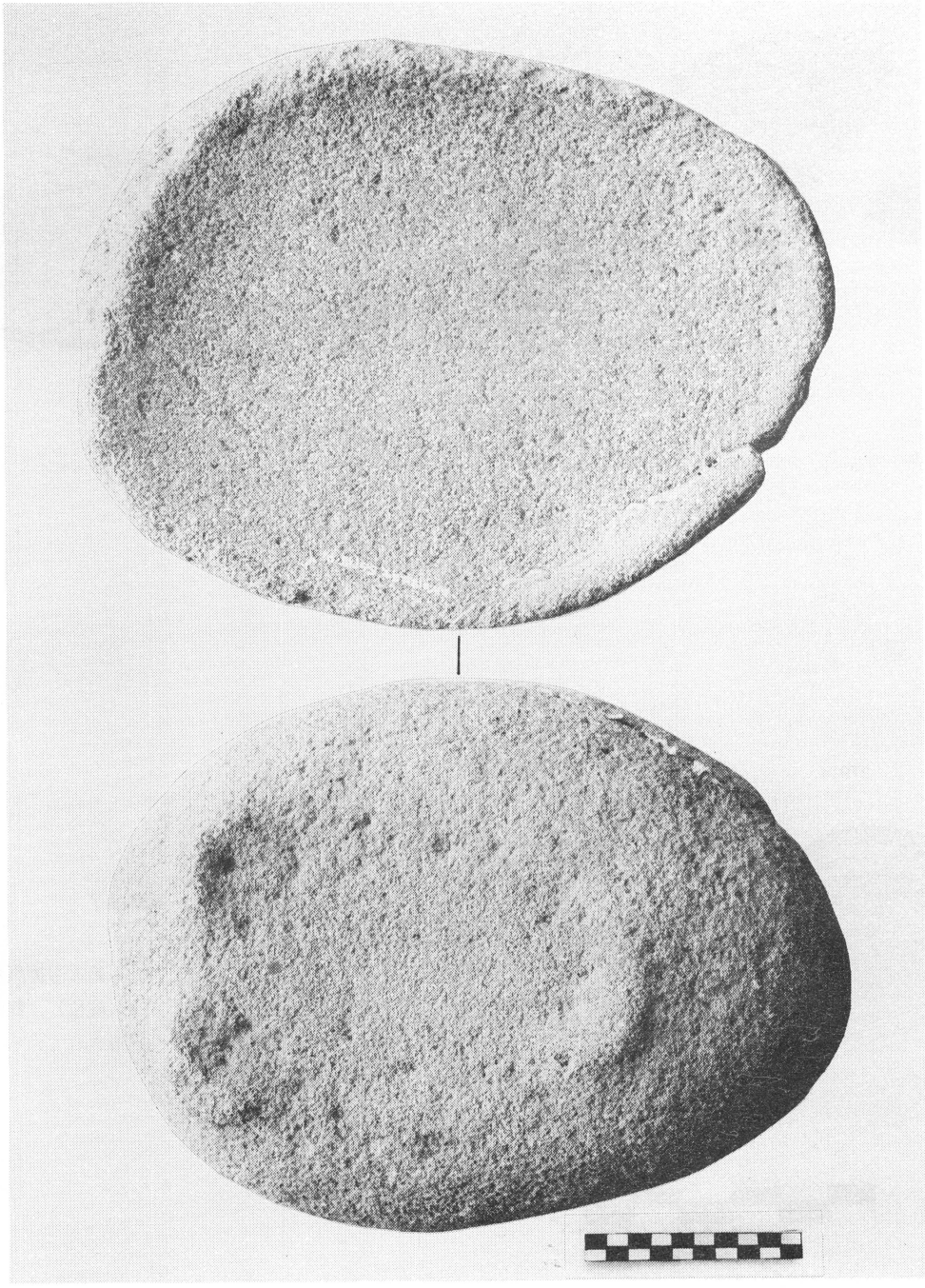
〔石弾・抉入石器・楕円形扁平石器〕（鉈状石器を含む）　　ＳＰ・L13



〔穿孔石・溝状擦痕のある石器〕



273 a

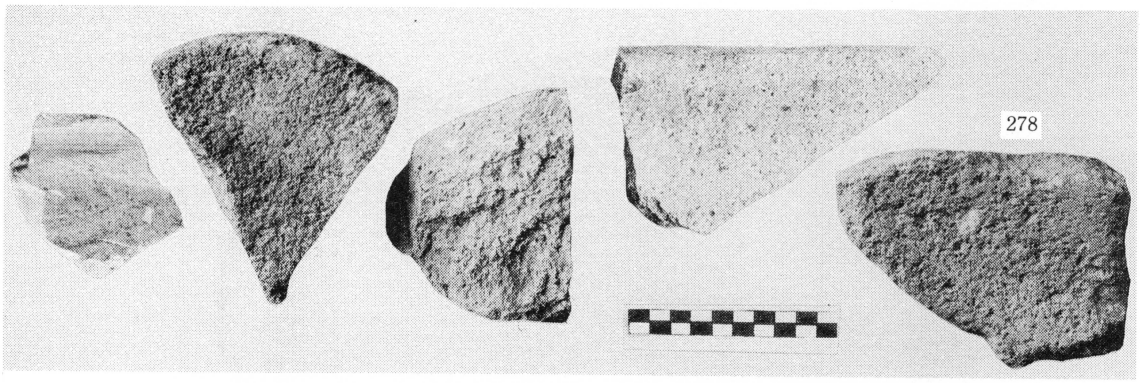


273 b

〔石　皿〕

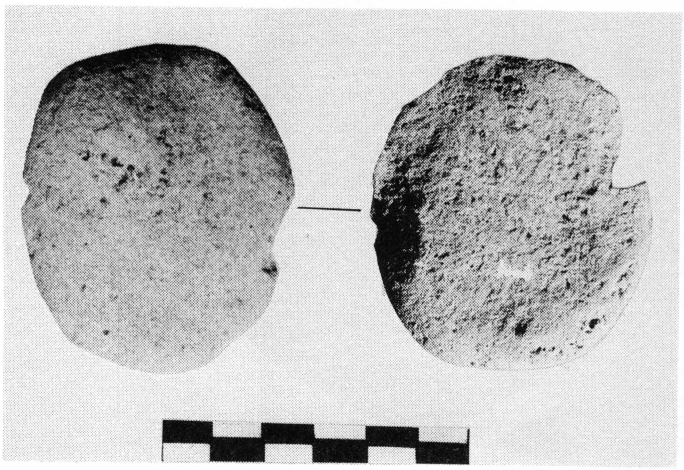
SP・L15

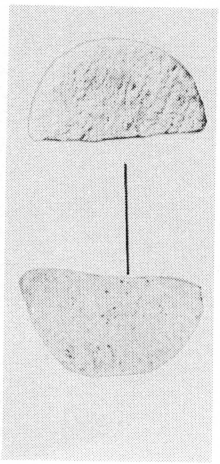
274　275　276　277



〔石　錘〕

279 a　279 b　☆



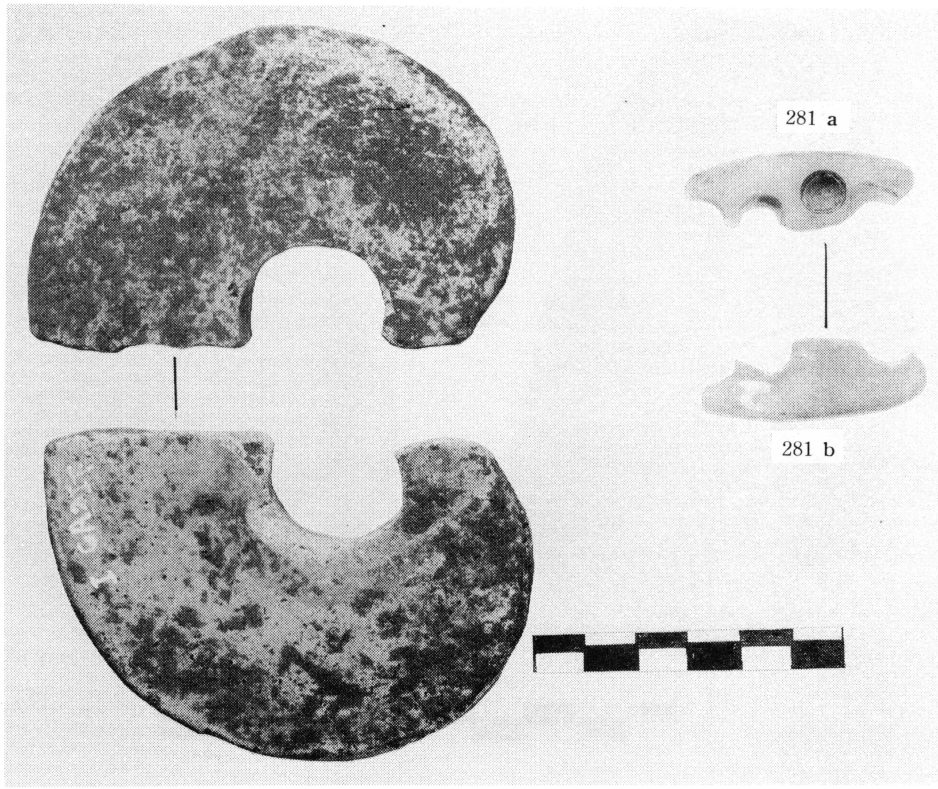


垂飾品？

表裏とも擦痕があり（縦位）、側面も整形されている

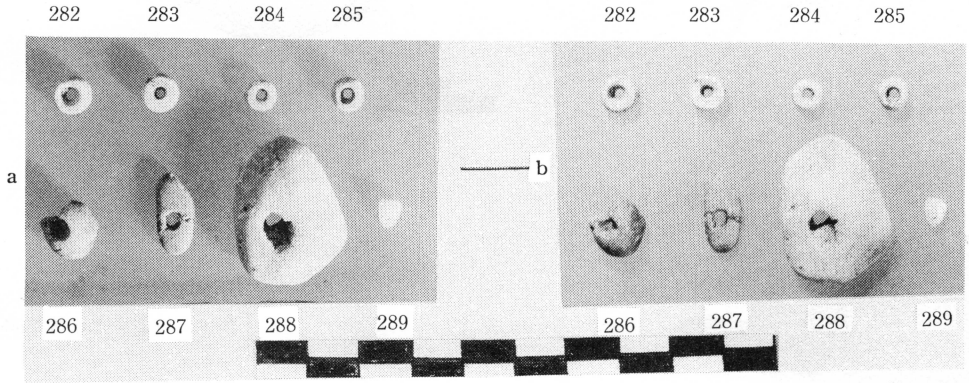
〔垂飾品〕

280 a



280 b

〔小玉類〕



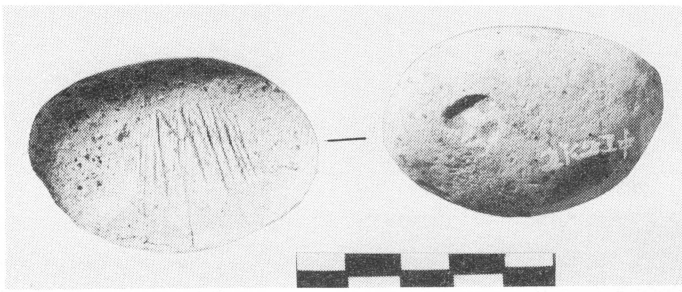
〔線刻石〕

290 a　　290 b

☆ 290•291 は
（写真のように接着できる。）

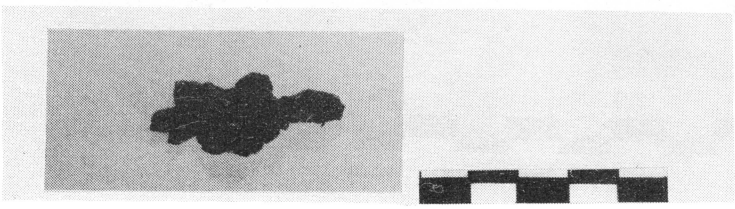
291 b　　291 b

292 a　　292 b



〔鉄製品〕

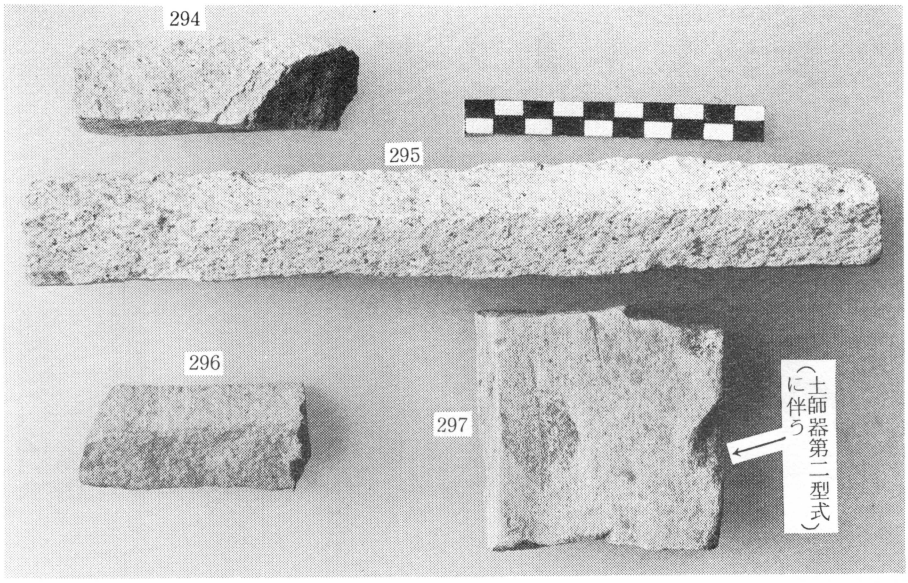
293



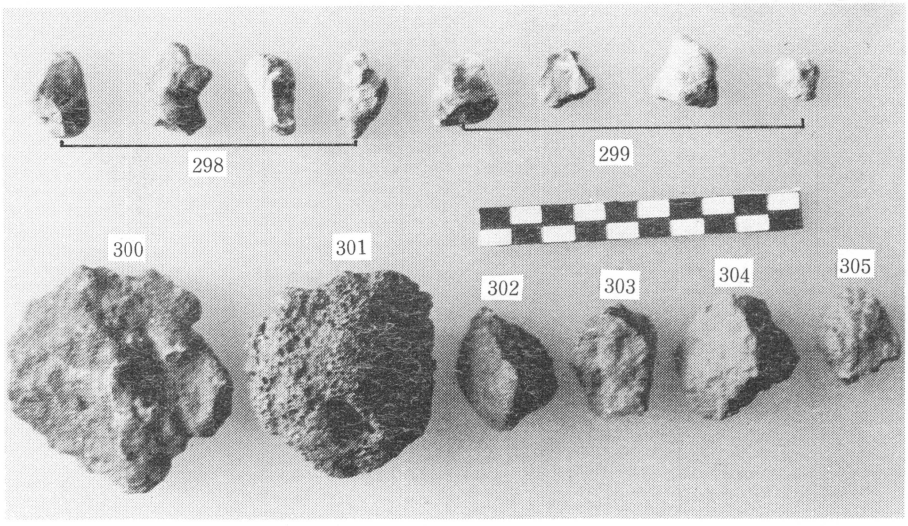
☆ 293 の
用途・機能・形状等不明
である。

〔観音林遺跡（第五次）出土岩質参考資料〕　　ＳＰ・L18

〔柱状石等〕　　〔その１〕



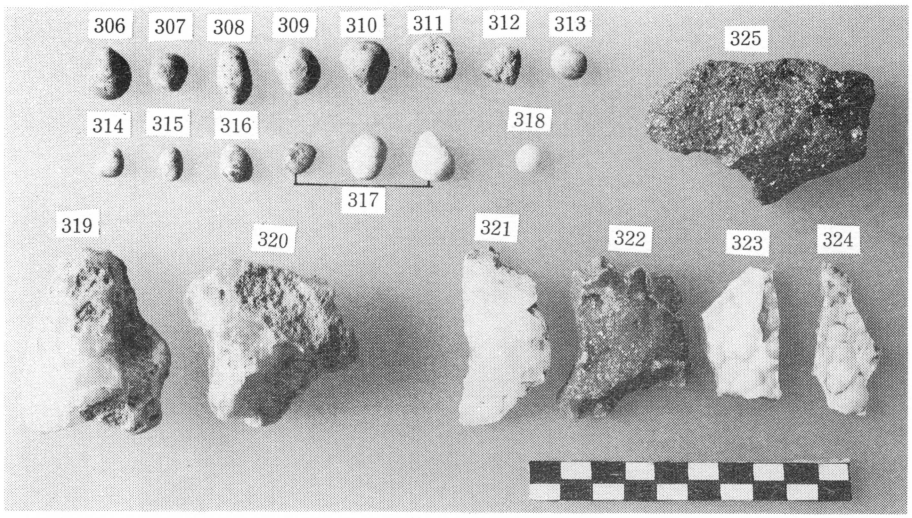
〔緑色原石・自然石等〕　　〔その２〕



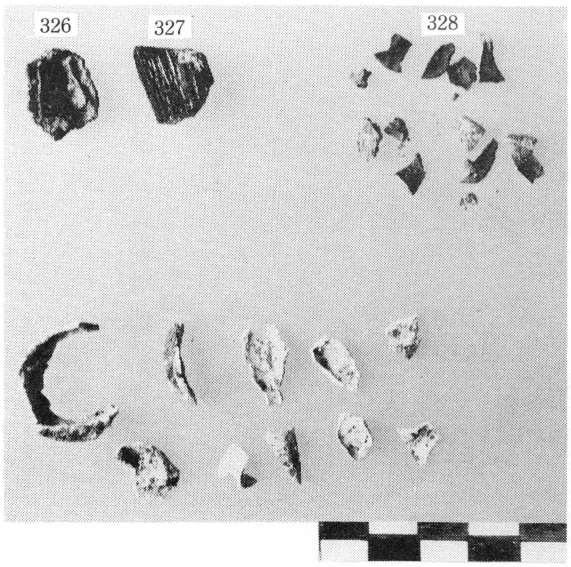
〔緑色原石・自然石・鉱石等〕

ＳＰ・L19

〔その３〕



〔植物等〕



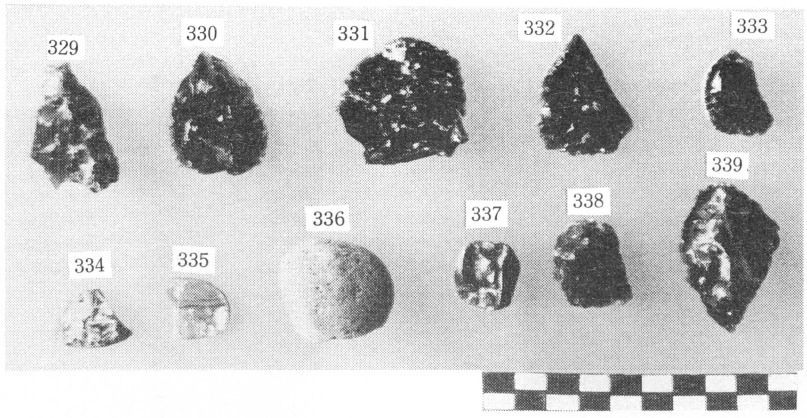
参考品
（現在のもの）

〔黒曜石・木炭〕

ＳＰ・L20

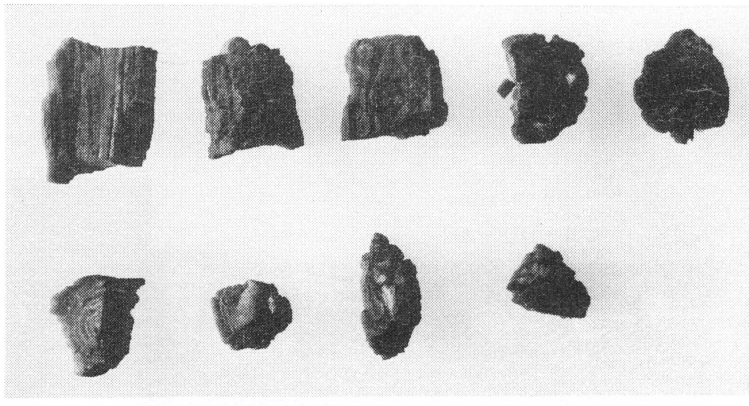
〔その４〕

（黒曜石）

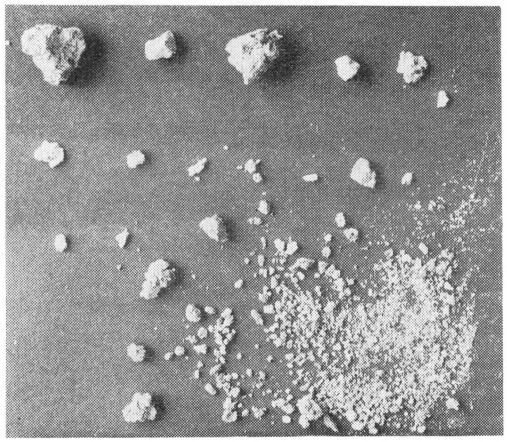


（木　炭）

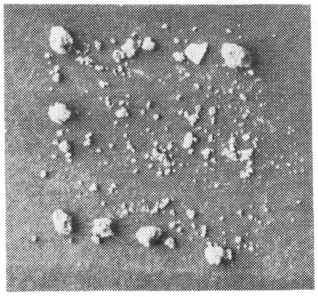
〔340〕



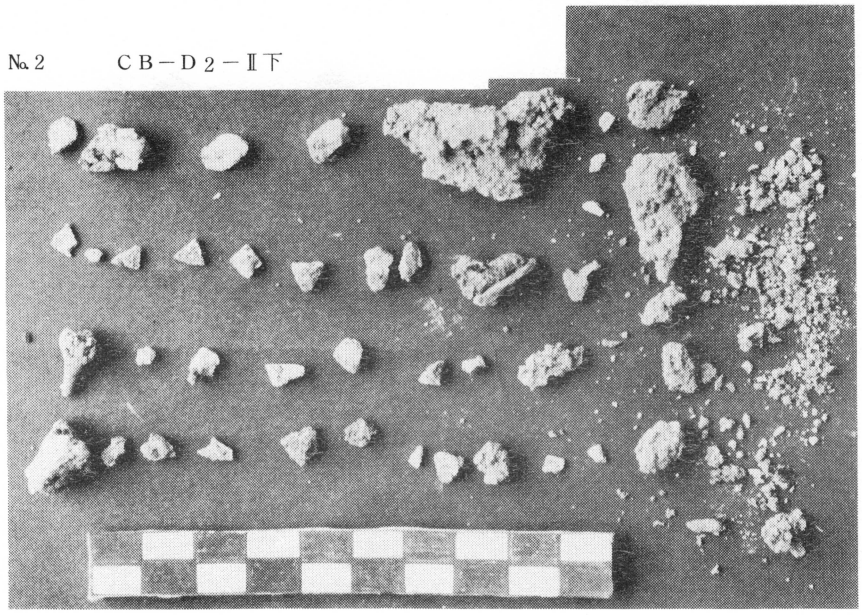
No.1　ＡＫ２－Ⅱ



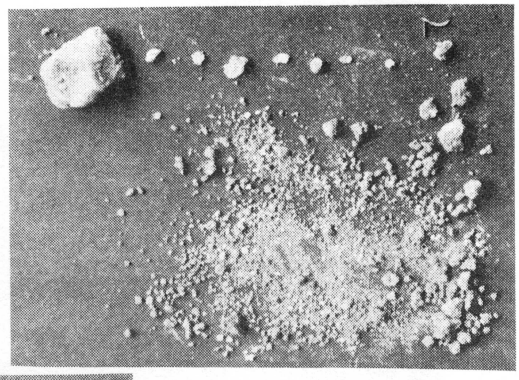
No.3　ＡＫ１－Ⅱ



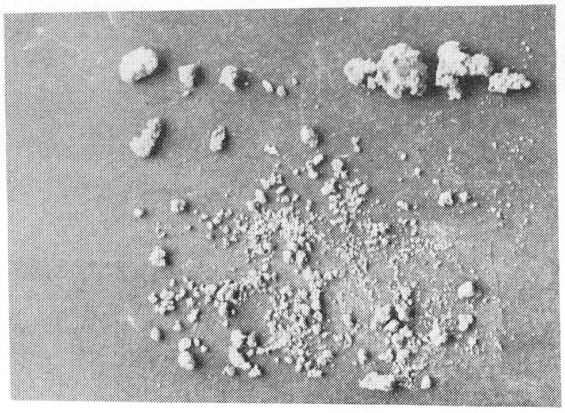
No.2　ＣＢ－Ｄ２－Ⅱ下



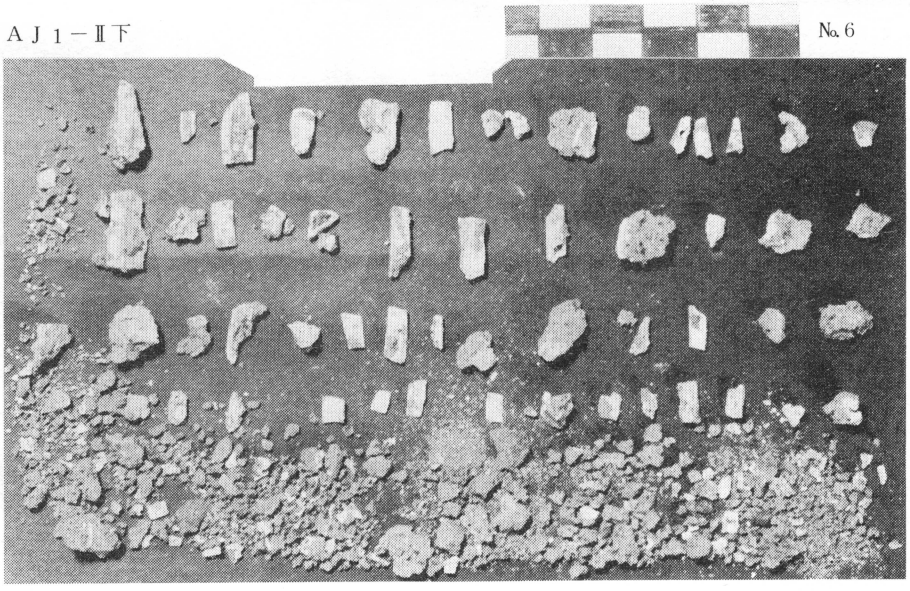
No. 4　　ＣＡ－Ｂ１－Ⅱ下



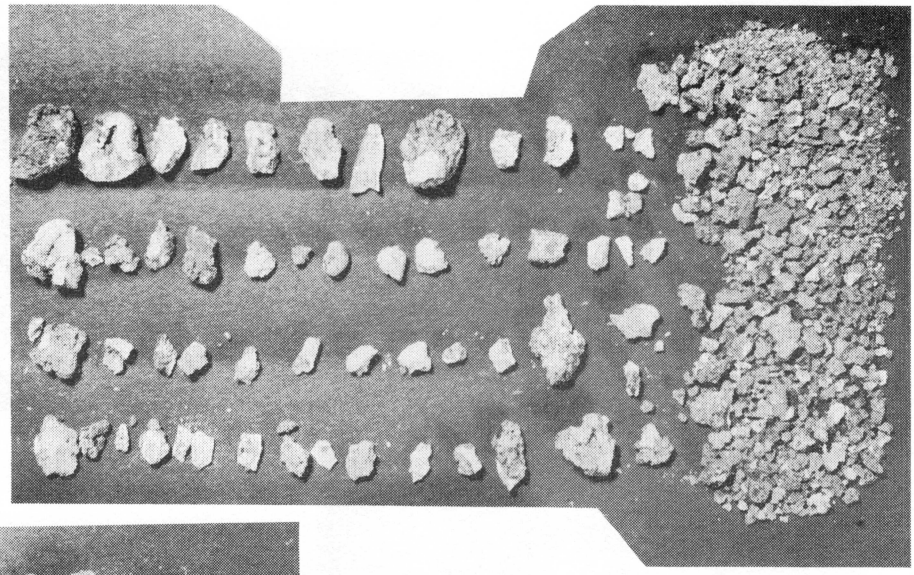
No. 5　　ＡＫ１－Ⅱ下（焼土内）



ＡＪ１－Ⅱ下　　No. 6

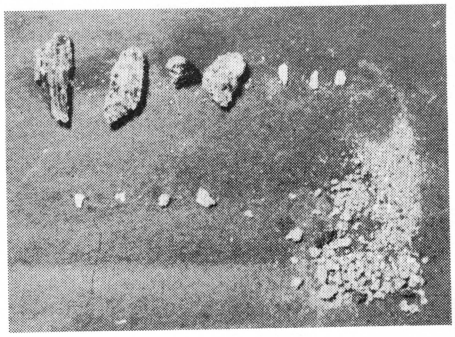


資No. 7



ＡＪ２－Ⅱ下（北壁下）

資No. 8

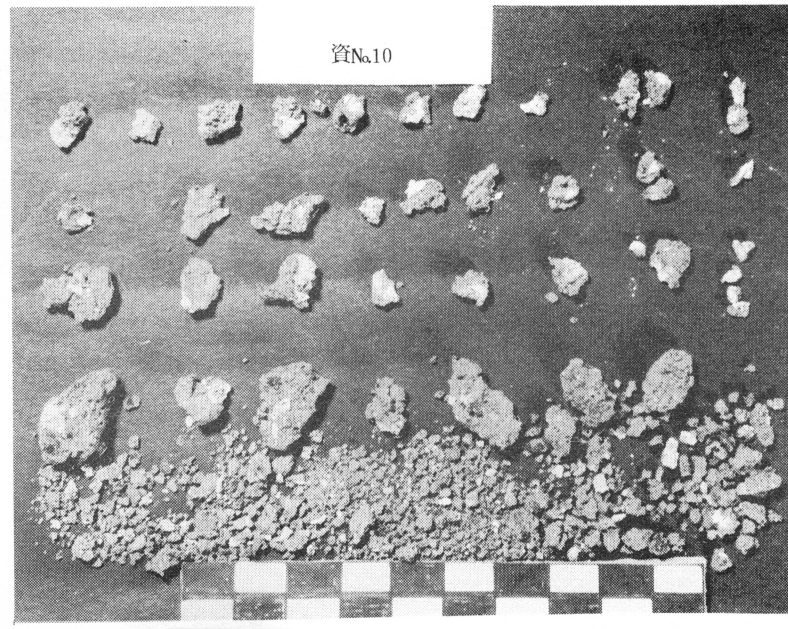


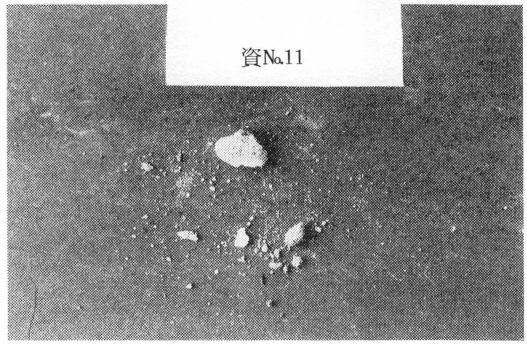
ＡＫ１－Ⅱ上（ローム上）

資No. 9

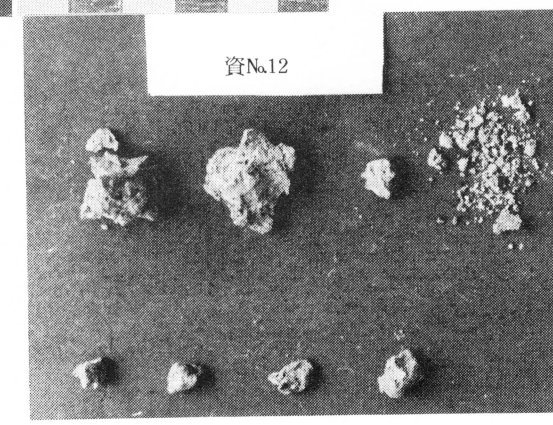
ＡＫ２－Ⅱ上（ローム上）

K2－Ⅱ上（ローム上）



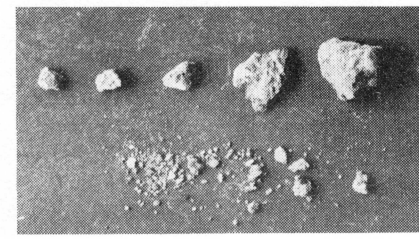


AK2－Ⅱ下



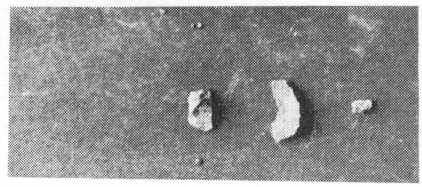
CA－B1－Ⅱ中
（四脚壺）

No.13



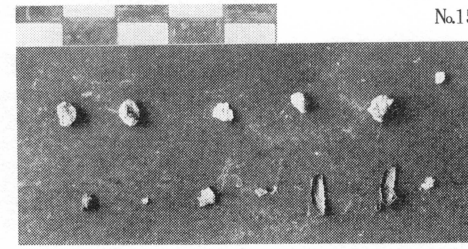
ＡＪ１－Ⅱ中

No.14



ＣＡ－Ａ１－Ⅱ

No.15



ＣＡ－Ａ１－Ⅱ

☆参考文献

① 観音林遺跡　（1973・1984・1985・1986）
五所川原市教育委員会

② 五月女萢遺跡　（1983）　市浦村教育委員会

③ 亀ケ岡式土器　（1984）　村越　潔　ニューサイエンス社

④ 「白　坂」　（1983）　山岸英夫　北海道松前町教育委員会

⑤ 北奥の古代文化　（1975）　平山久夫編　学生社刊

⑥ 亀ケ岡遺跡発掘調査報告書
（1974）　青森県教育委員会

⑦ 青森県考古学　（1984）　青森県考古学会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

観音林遺跡（第五次）

○発行年月日　昭和62年3月31日

○発行者　青森県五所川原市教育委員会

代表　教育長　高橋清徳

住所　五所川原市岩木町12番地

○著者　新谷雄蔵

川村真一

○印刷所　㈲小野一印刷